北陸自動車道遺跡調査報告

―― 上市町遺構編 ――

神田遺跡　　飯坂遺跡
正印新遺跡　　江上A遺跡
下経田遺跡　　江上B遺跡
中小泉遺跡　　東江上遺跡

1981年3月

上市町教育委員会

北陸自動車道遺跡調査報告

—— 上市町遺構編 ——

神田遺跡　　飯坂遺跡
正印新遺跡　　江上A遺跡
下経田遺跡　　江上B遺跡
中小泉遺跡　　東江上遺跡

1981年3月

上市町教育委員会

例　言

1．本書は，高速自動車国道北陸自動車道（上市工事区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書に収録したのは，富山県中新川郡上市町に所在する以下の七遺跡である。
神田遺跡（神田字山上29他），正印新遺跡（下経田 114～ 118他），下経田遺跡（下経田53・54，中小泉27～29他），中小泉遺跡（中小泉30～33），飯坂遺跡（飯坂５，７～10），江上Ａ遺跡（江上 237～ 239），江上Ｂ遺跡（江上91～94），東江上遺跡（東江上96の１他）

3．調査は，日本道路公団（新潟建設局）の委託を受け，文化庁・富山県教育委員会の指導・協力を得て，上市町教育委員会が主催した。なお，調査の実施にあたっては，富山県埋蔵文化財センターの職員の派遣を受けた。

4．調査参加者は，下記のとおりである。各遺跡の調査担当者は，別表に記した。
橋本　正・岸本雅敏・狩野　睦・山本正敏・神保孝造・酒井重洋・宮田進一・久々忠義・橋本正春・斉藤　隆・舟崎久雄（調査担当者），井戸川義邦・広島丈志・福垣博子（調査事務担当者），松井英司・長岡靖之・松井和幸・貸　元洋・北野博司・三好博喜・山村郁郎・白田裕二・中村久枝・佐々木美津子・松井芳香・荒引一美（調査補助員）

5．調査期間中，次の諸機関の協力を得た。記して感謝の意を表する。
日本道路公団新潟建設局，同富山工事事務所，富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センター，林建設K.K.，日産建設K.K.，五洋建設K.K.，岩崎建設K.K.，福田組K.K.，麻柄建設K.K.，上市町神田地区，下経田地区，中小泉地区，江上地区，東江上地区，森尻地区

6．本書は，調査担当者が編集・執筆を行い，執筆分担は，下記のとおりである。なお，本書作成にあたって，富山県埋蔵文化財センターの職員の協力を得た。
Ⅰ・Ⅱ岸本雅敏，Ⅲ－１宮田進一，Ⅲ－２橋本正春，Ⅲ－３酒井重洋，Ⅲ－４狩野　睦，Ⅲ－５岸本雅敏，Ⅲ－６久々忠義，Ⅲ－７宮田進一，Ⅲ－８岸本雅敏，Ⅳ橋本　正

7．本書表題の道路名称は，引用の煩雑さを避けるため，略称を用いている。

8．報告書は，遺構編，土器・石器編，木製品・総括編の三部作として編集する計画である。本書は，第一分冊遺構編にあたる。

9．航空写真及び航空測量は，アジア航測K.K.に委託した。航空測量を実施した遺跡は，神田遺跡・中小泉遺跡・江上Ａ遺跡・江上Ｂ遺跡である。

10．遺構には，遺跡ごとに一連の通し番号を付した。その番号の前に，ＳＡ：築地・塀・柵，ＳＢ：建物，ＳＤ：溝，ＳＥ：井戸，ＳＩ：住居，ＳＫ：土坑・穴，ＳＸ：その他，の分類記号を併記した。この分類記号は，『平城宮発掘調査報告Ⅱ』「付章　遺跡遺物の分類標示方法」〔奈文研1962〕に拠る。

11．調査期間中から遺物整理にとりかかっている今も，多くの諸機関・諸氏の指導と助言を受けており，それは，今後も続くはずである。従って，その点に関する記述は，総括編において行うのが適当であると考え，今回は割愛した。

別表　調査の概要

遺　跡　名（旧仮称）	所　在　地	調　査　期　間	発掘面積	調査担当者
神　田（ＨＧ０５）遺跡	上市町神　田	1979・6・25～1979・7・27(延22日)	約 3,000㎡	久々　忠義 橋本　正春
正印新（ＨＧ06　No.1）遺跡	上市町正印新	1979・6・27～1979・9・6(延41日)	約 3,000㎡	酒井　重洋 神保　孝造
下経田（ＨＧ06－No.2）遺跡	上市町下経田	1979・7・10～1979・9・13(延32日)	約 3,500㎡	岸本　雅敏 宮田　進一
中小泉（ＨＧ06－No.3）遺跡	上市町中小泉	1979・7・30～1979・12・15(延50日)	約 6,000㎡	狩野　睦
飯　坂（ＨＧ06 No.4・5）遺跡	上市町飯　坂	1979・9・6～1979・12・28(延60日)	約 6,500㎡	岸本　雅敏 宮田　進一
江上Ａ（ＨＧ06－No.6）遺跡	上市町江　上	1979・8・2～1979・11・10(延40日)	約 3,000㎡	酒井　重洋 久々　忠義
江上Ｂ（ＨＧ06－No.7）遺跡	上市町江　上	1979・7・16～1979・11・10(延70日)	約 7,000㎡	宮田　進一 橋本　正春
東江上（ＨＧ07）遺跡	上市町東江上	1979・5・16～1979・7・10(延41日)	約 4,000㎡	岸本　雅敏 宮田　進一

（注）昭和53年度に実施した試掘調査については，別途刊行した報告書〔狩野，橋本1979〕を，また昭和54年度分の試掘調査の概要は，〔岸本1980ａ・ｂ〕・〔宮田1980ａ・ｂ〕を参照。

目　次

Ⅰ　位置と環境……1

Ⅱ　調査の経過……2

1．調査の契機……2

2．予備調査……2

3．記録保存調査……2

Ⅲ　遺　　構……3

1．下経田遺跡……3

2．神田遺跡……4

3．正印新遺跡……6

4．中小泉遺跡……8

5．飯坂遺跡……10

6．江上A遺跡……12

7．江上B遺跡……15

8．東江上遺跡……18

Ⅳ　ま　と　め……20

挿　図

第1図　遺跡の位置と周辺の地形……1
第2図　調査進行図……2
第3図　地形及び区割図（下経田遺跡）……3
第4図　地形及び区割図（神田遺跡）……4
第5図　土層基本図（正印新遺跡）……6
第6図　地形及び区割図（正印新遺跡）……6
第7図　地形及び区割図（中小泉遺跡）……8
第8図　地形及び区割図（飯坂遺跡）……10
第9図　地形及び区割図（江上A遺跡）……12
第10図　地形及び区割図（江上B遺跡）……15
第11図　地形及び区割図（東江上遺跡）……18

表

表1　神田遺跡建物・構一覧表……23
表2　正印新遺跡建物一覧表……24
表3　正印新遺跡溝一覧表……24
表4　正印新遺跡穴他一覧表……24
表5　江上A遺跡建物・構一覧表……24
表6　江上A遺跡環状溝一覧表……24
表7　江上A遺跡溝一覧表……25
表8　江上A遺跡その他の遺構一覧表……25
表9　江上B遺跡建物・構一覧表……25
表10　東江上遺跡建物・構一覧表……26
表11　東江上遺跡溝一覧表……26
表12　東江上遺跡竪穴遺構他一覧表……26

図　版

図版1　遺跡と周辺の地形
図版2　神田遺跡遺構配置図
図版3　神田遺跡遺構平面図
図版4　神田遺跡遺構平面図
図版5　神田遺跡遺構平面図
図版6　神田遺跡遺構平面図
図版7　正印新遺跡遺構配置図1
図版8　正印新遺跡遺構配置図2
図版9　正印新遺跡遺構平面図
図版10　正印新遺跡遺構平面図・土層断面図
図版11　中小泉遺跡遺構配置図
図版12　中小泉遺跡遺構平面図
図版13　中小泉遺跡遺構平面図
図版14　中小泉遺跡時代別遺構分布図
図版15　中小泉遺跡溝土層断面図
図版16　飯坂遺跡遺構配置図
図版17　飯坂遺跡第2文化層遺構平面図
図版18　江上A遺跡遺構配置図
図版19　江上A遺跡建物柱穴断面図
図版20　江上A遺跡建物柱穴断面図
図版21　江上A遺跡遺構平面図
図版22　江上A遺跡遺構平面図
図版23　江上A遺跡遺構平面図
図版24　江上A遺跡溝土層断面図
図版25　江上B遺跡遺構配置図
図版26　江上B遺跡遺構平面図
図版27　江上B遺跡遺構平面図
図版28　江上B遺跡遺構平面図
図版29　江上B遺跡遺構平面図
図版30　江上B遺跡遺構平面図・柱根断面図
図版31　江上B遺跡遺構平面図
図版32　江上B遺跡時代別遺構分布図
図版33　東江上遺跡遺構配置図
図版34　神田遺跡
図版35　神田遺跡
図版36　神田遺跡

図版37　正印新遺跡
図版38　正印新遺跡
図版39　正印新遺跡
図版40　下経田遺跡
図版41　中小泉遺跡
図版42　中小泉遺跡
図版43　中小泉遺跡
図版44　飯坂遺跡
図版45　飯坂遺跡
図版46　飯坂遺跡
図版47　江上A遺跡
図版48　江上A遺跡
図版49　江上A遺跡
図版50　江上A遺跡
図版51　江上A遺跡
図版52　江上A遺跡
図版53　江上A遺跡
図版54　江上B遺跡
図版55　江上B遺跡
図版56　江上B遺跡
図版57　江上B遺跡
図版58　江上B遺跡
図版59　江上B遺跡
図版60　東江上遺跡
図版61　東江上遺跡
図版62　東江上遺跡
図版63　東江上遺跡

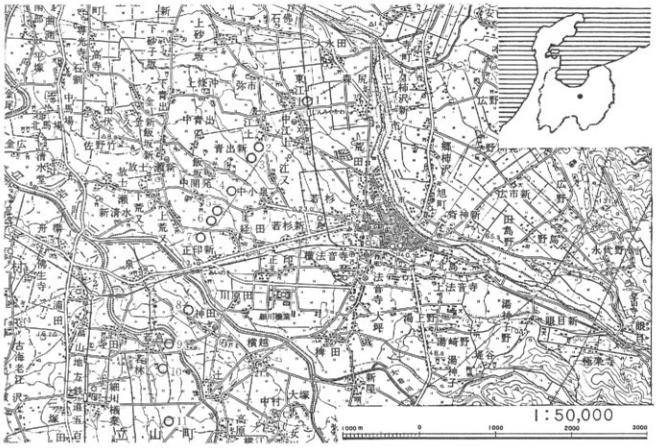
I　位置と環境

立山連峰に源を発する上市川は，西の常願寺川，東の早月川との間をぬって富山湾に注いでいる。上市町は，富山市の東方約10kmに位置し，この上市川が形成した扇状地を占めている。本書で取りあげた遺跡の多くは，この扇状地の扇端近くに形成された沖積平野中の微高地上に立地する（第１図）。上市川に接してその左岸に広がる上市市街の北西にあたり，遺跡は，南の神田から北の東江上に至る南北約３km間に点在している。遺跡の平均標高は15mである。このうち神田遺跡のみは，上市川の西の谷から流れ出た小河川，白岩川と栃津川に挟まれている。

これらの遺跡は，正印新・下経田・中小泉・飯坂遺跡の四遺跡，江上Ａ・同Ｂ遺跡の二遺跡が互いに隣接して存在し，南端の神田遺跡，北端の東江上遺跡もやや離れているとはいえ，上記の諸遺跡とは至近距離の位置にある。これら一連の遺跡は，弥生時代（後期）と中世の二つの時代に中心をもつ遺跡群を形成している。

周辺に目を向けると，扇頂部の段丘上には，眼目新丸山遺跡・極楽寺遺跡など先土器・縄文時代の著名な遺跡が数多く分布している。一方，江上Ａ遺跡などの遺跡群の周囲には，遺跡がほとんど知られておらず，空白に近い状況である。これは，この地域に遺跡が存在しないことを意味するものではなく，逆に，土中深く埋蔵されたままの未発見遺跡が少なくないことを表わしているといえよう。本書で取りあげた遺跡群の発見は，このことを如実に示している。

（岸本雅敏）



第Ｉ図　遺跡の位置

1．東江上遺跡　2．江上Ｂ遺跡　3．江上Ａ遺跡　4．飯坂遺跡　5．中小泉遺跡　6．下経田遺跡
7．正印新遺跡　8．神田遺跡　9．若宮Ｂ遺跡　10．若宮Ａ遺跡　11．辻坂の上遺跡

II　調査の経過

1.　調査の契機

北陸自動車道の富山市・朝日町間のルートが日本道路公団から発表されたのは，昭和48年３月のことであった。富山県教育委員会では　この道路敷予定地内の遺跡の状況を把握するために，その年の秋と翌年の春の二期にわたって遺跡分布調査を行い，多くの遺跡を新たに発見している。その結果は，別途刊行された報告書〔橋本1974〕のとおりである。上市町域に限っていえば，略称ＨＧ05・06・07の三遺跡がこの調査で発見されたものである。わずか三遺跡とはいえ，その内ＨＧ06遺跡は，全長 1.8kmにも及ぶ大遺跡であると推定されていた。

2.　予備調査

富山県教育委員会は，分布調査で確認した遺跡の措置をめぐって，日本道路公団と協議を重ねていたが，富山以東の工事開始に先だち，まず立山町・上市町域の遺跡範囲・内容の確認を目的とした試掘調査を行うこととした。この調査は，昭和51年から断続的に行ってきたが，上市町のＨＧ06遺跡の調査が実施されたのは，工事着工を間近にひかえた昭和53年８月から10月のことである。この調査は翌年４月にも継続して行われ，ＨＧ05・07遺跡も相ついで対象となった。予備調査によってＨＧ06遺跡は，その推定範囲内に大小七遺跡として存在することが判明した。ＨＧ06－No.１～No.７と仮称した正印新遺跡以下，下経田・中小泉・飯坂・江上Ａ・同Ｂの諸遺跡がそれである〔狩野・橋本1979，岸本1980ａ・ｂ〕。なお，各遺跡の旧略称と正式名称との関係は，別表１に示したとおりである。

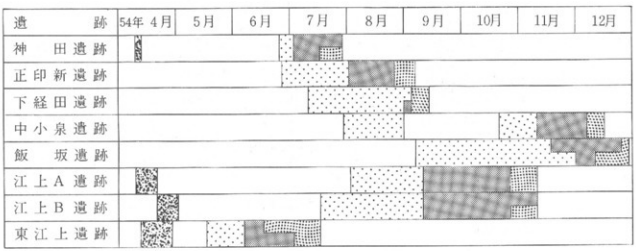
3.　記録保存調査

予備調査の結果をふまえ，富山県教育委員会・上市町教育委員会・日本道路公団の三者で協議を重ね，上市町域の遺跡の発掘調査は，日本道路公団の委託を受けて上市町教育委員会が行うことになった。

発掘調査は，昭和54年４月に予備調査を完了したのち，５月16日から東江上遺跡に着手し，調査員・作業員を順次増員しながら計八遺跡の調査を遂行した〔第２図〕。すべての調査を完了したのは，歳の瀬もおしせまった12月28日であった。

八遺跡の総発掘面積は，約36,000㎡にも及び，調査の実地にあたって富山県埋蔵文化財センターから調査担当者(最大時で８名）の派遣を受けた。

（岸本雅敏）



第２図　調査進行図

Ⅲ 遺　　構

1. 下経田遺跡

A 層　序

地表から80cm下の地山７層（淡黄褐色砂層）まで，七層に分かれる。上から，表土層（１層），灰褐色土層（２層），黒色粘質土層（３層），淡黄褐色砂層（４層），灰色粘質土層（５層），黒色粘質土層（６層）である。３層は，黒色粘質土層（３ａ層）とやや褐色がかった黒色粘質土層（３ｂ層）に分かれ，層厚は，30cmである。昭和53年度試掘調査〔狩野他1979〕で出土した板組み遺構及び珠洲は，３ａ層，土師器は，３ｂ層より出土している。４層は，遺跡の中央部には，見られない。４層は，20cmの厚さで，試掘で出土した縄文土器の包含層にあたる。地山は，北西方向に傾斜を持つ。

そこで，試掘の成果をうけて，第１文化面，第２文化面ごとに，遺構の検出を行った。１・２層は，ユンボによる排土を行い，３層からは人力で掘り下げたが遺構は，検出できなかった。また，上記の板組み遺構は，機械による掘り過ぎのため，消失した。さらに，４・５層を掘り下げ，第２文化面の遺構の検出を行ったが，穴以外の遺構は検出できなかった。

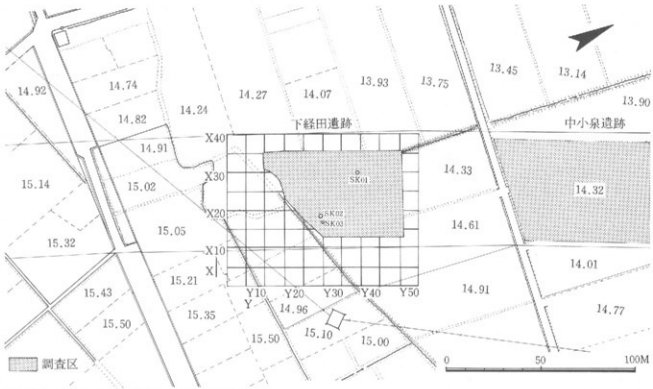
B 遺　構（図版40）

穴三個を検出した。ＳＫ01･02から，トチの実及び自然木を検出したが，ＳＫ03の覆土は，無遺物層であった。ＳＫ01は，長軸80cm×短軸70cmの楕円形で，深さ25cmである。ＳＫ02は，65cm×60cmのほぼ円形で，深さ10cm，ＳＫ03は，55cm×50cmのほぼ円形で，深さ13cmである。これらの穴は，自然の窪みに木の実が入ったものであろうと考える。

C 出土遺物

遺物には，縄文時代後期の土器，古式土師器，土師質土器，珠洲がある。遺物自体に，川の運搬等による摩滅痕が見られず，遠地から流れ込んで堆積したものとは考え難い。しかし，それらに伴う遺構は，確認できなかった。

（宮田進一）



第３図　地形及び区割図（Ｓ＝1／2,000）

2. 神田遺跡

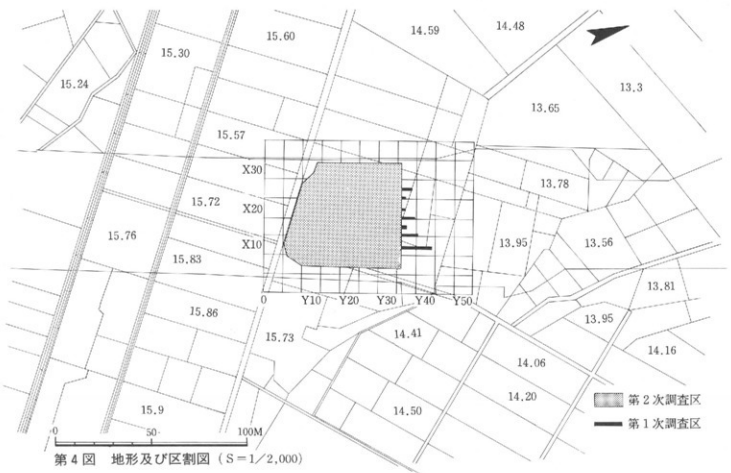
A 層　序（第4図）

神田遺跡の層位は，1層耕作土約20cm，2層灰色粘質土約15cm，3層黄白色砂質土（遺構検出面）である。発掘区の南西部では，3層が褐色砂礫層となる。遺構検出面は，ほぼ平坦であるが，西側が少し高くなる。

B 遺　構（図版2～6，表1）

検出した遺構は，掘立柱建物・柵・井戸・溝・穴他で中世に属し，発掘区中央部に集中する（図版2）。

掘立柱建物は，二十棟検出し，すべてが総柱構造の建物である（以下建物とする）。建物の規模では，2×1間（SB002）から5×4間（SB006・009）までのものがあり，2×2間と4×4間の建物が各々五棟みられた。各建物の桁・梁行の全長は，完数尺（1尺30cm）を用いており，七尺から四十四尺のものが存在する。特に十六尺を使う建物が多く，十棟の建物にみられた。SB005・014は，正方形の建物で，桁・梁行ともに十六尺である。柱間寸法は，七から十尺を多用し，四尺（SB018）・六尺（SB017）例もある。桁・梁行の各柱間を等尺とする建物が八棟あり，特に2×2間の建物に顕著である。中央部の柱間が，側より広い建物が八棟ある。その狭い柱間寸法を持つ側1間分を廂（塀）とすれば，一ないし三面廂付建物となる可能性がある[注1]。ここでは建物に含めておく。建物の方位は，N－2°～7°－EとN－9°～11°－Eの二群に大別できる。前者には十七棟が属し，うち南北棟は十三棟である。後者には三棟が属し，発掘区西側に集中している。建物は，東・西・中央の三群に分かれ，中央建物群をはさむ配置をとる。中央建物群は十棟の建物が集中し，数回の建て替えを行っている。中央建物群は，さらに北・南・中央の三グループに分けられ，大半の遺構の新旧（時間的）関係がつかめた[注2]。しかし，各群どうしの関係は不明である。東・西建物群では，同位置で重複する建物があるが，柱穴は重複しない。柱穴の柱根部分が，空洞となっていたものが数例みられた。こ



第4図　地形及び区割図（S＝1／2,000）

れは，柱根が近年まで遺存し，その後，自然消滅したことを示す。長棟の建物が三棟あり，他は短棟（４×３間など）の建物に属す。短棟のうち，二棟は方棟である。

柵は，十五列検出し，大半が建物に伴う。柵を建物に含め，建物側柱列とする見方もあるが，柱間寸法のちがい，建物側柱列との位置関係，柱穴規模の比較の三点を基に柵を決定した。最長の柵は，ＳＡ054で五十一尺を測り，ＳＢ006に伴うとみられる。最小の柵はＳＡ052・062で，八尺である。前者は，ＳＢ004に伴い発掘区西方へ伸びると思われる。後者は，ＳＢ020に伴うＳＡ063に直交し，ＳＫ105に接する。各柱間は，建物と同よう完数尺を使う。

溝は，九本検出した。うち五本は，中央建物群の桁・梁行に平行し，他の四本は東と中央建物群との間にある。これらの溝は，比較的小規模（幅５～30cm・深さ約５cm）といえ，しかも一直線に伸びることから，建物の雨落ち溝の可能性を持つ。ＳＤ121とＳＤ122，ＳＤ125とＳＤ126，ＳＤ127とＳＤ128は，互いに直角連結すると考えられる。

確実な井戸は，一基のみでＳＢ005に接して検出された（図版６の１，図版36の１）。井戸ＳＥ081は，砂礫層を円形（直径約2.5m）に掘り込み，中程から下方を方形（内径１×0.9m）とする。木製の井戸枠を井桁に組んだと考えられる。底面から珠洲が出土した。ＳＫ102・105は，井戸の可能性をもつ。前者は，ＳＥ081と同ようの形状を呈し，砂礫層まで掘り込む。

ＳＫ103は，中央建物群の南西にあり，楕円形（長さ５m×幅４m×深さ0.9m）の穴である（図版６の３，図版36の２）。底・壁面は，鉄分が沈着して赤褐色を呈する。覆土内から鉄滓を検出した。また，周囲から鉄滓・ふいご羽口が出土しており，小鍛冶に関係する遺構と思われる。他に珠洲小壺・大甕破片が出土している。

建物の在り方をまとめておく。個々の建物は，完数尺を用い，総柱の各柱列を計画的に配して建てている。梁行２間以上の建物の多くは，住居と考えれる[注3]。大規模（３×３間以上）な建物は，中央と東側建物群に集中し，廂付建物の可能性を持つものが多い。建物は，すべて東偏し，中央部では各建物の中軸線（南北棟は梁行・東西棟は桁行を二等分した線）がほぼ同位置にみられる。時間的前後関係と方位を組み合わせ，建物を重複しないように配すると，一時期に三棟程度が六期に渡って存在したと想定できる。同一時期の各建物は，地割に従って配置されたと考える。これは，建物が計画的に建てられたことと，大規模建物の側柱列あるいは付属柵列が互いに平行・直交することから推定される。これらから，建物は群構成を持ち続けながら，同位置で長期に渡り建て続けられたといえ，公的性格[注4]を持つ建物群と考えたい。

なお，ＳＢ002・003・004は，別群を構成すると考えている。井戸一基と，それに類するもの二基が存在するが，不明な点が多いため，建物との関係はつかんでいない。

Ｃ　出土遺物（図版36の１・６）

遺物は，奈良・平安時代に属する須恵器，中世に属する珠洲・土師質土器・磁器・石器，近世に属する瀬戸などがある。建物群には，中世の遺物が伴い，珠洲の編年〔吉岡1976〕によれば，第Ⅰ期に中心を持つ。第Ⅲ期に属する資料もあるが，建物に伴うかは不明である。また，須恵器，瀬戸は建物に伴わない。磁器は，珠洲第Ⅰ期に伴い，中国製のものもある。立山町若宮Ｂ遺跡〔狩野他1981〕出土の珠洲大甕と接合する資料（ＳＫ103・ＳＥ081出土）がある。

（橋本正春）

註１　廂付建物と考えられるのは，ＳＢ003（東），ＳＢ006（東・西），ＳＢ011(西)，ＳＢ012（東・西），ＳＢ013（北），ＳＢ016(東・西・北)ＳＢ019（西・北・南），ＳＢ020（東・西・南）の八棟である。これらは，中央部より二尺以上狭い側を持つものである。

註２　中央建物群北では，ＳＫ102→ＳＢ006→ＳＢ008→ＳＢ009→ＳＤ121・122の順(新→旧)で古くなる。この他にＳＢ009→ＳＤ126・125とＳＢ009→ＳＸ112の関係が判ったが，溝と穴との関係は不明である。中央では，ＳＢ010→ＳＢ011→ＳＤ123→ＳＢ013→ＳＢ012→ＳＸ113の順で古くなる。南では，ＳＢ015→ＳＢ014の順で古くなる。しかし，北・中央・南建物群の関係と東・中央・西建物群の関係は，不明である。

註３　ここでは，総柱建物はすべて倉庫と考えず，住居例もあると考えた。倉庫が二十棟集中していたとは考えなかった。

註４　橋本正氏の教示による。建物群が，計画的に建てられた建物だとすれば，一村落の民家と考えるより，上位の人々に属する建物と考えられ，役所・武家屋敷などを想定している。地割に従って建物を配した例として，福井県一乗谷朝倉氏遺跡〔朝倉氏遺跡調査研究所1976〕などでみられる。時代は異なるが，本遺跡の性格を知るうえでの手がかりになると考えられる。

3. 正印新遺跡

A 層 序

遺跡地は，上市川に由来する砂・粘質土・粘土が複雑に重なりあって堆積し，遺跡内各地点の層序は一様でない。1・2層は耕作土で，新旧の二面が認められる地点もある。

3層は，暗黒褐色砂層。4層は，褐色砂層で遺跡内に広く分布する4a層と，暗黒褐色粘土層で遺跡内に部分的に堆積する4b層に分けられる。

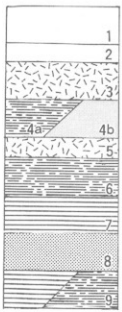
5層は，遺跡全体に5～10cmの厚さで堆積する砂層で，色調は，暗黒褐色を呈する。5層は，弥生時代後期・古墳時代前期の遺物包含層で，遺物の出土は遺跡東側に多く，西側にゆくにつれて少量となる。

6層は，4a層と似た褐色砂層でほぼ遺跡全体に広がる。遺構は，6層上面・7層上面で確認できるものが多い。

7層は，細かい砂粒を含む青色粘質土で厚さ10～20cmの堆積がある。中・近世の遺構は，3～5層で検出され，遺構は，6・7層を地山としている。

8層は，弥生時代中期の遺物包含層で，暗黒灰色粘土層である。8層の分布は，北東部から南西部にかけての遺跡東側の半分ほどに限られ，遺物は南東部に多い。

弥生時代中期の地山は，広範囲に堆積する青灰色粘土層と，遺跡の中央部に幅約15mで，東西に堆積する褐色砂層がある。両者には，木葉・枝・流木などの自然木，トチ・クルミなどの実，根回り5mの杉などの根株が埋没していた。

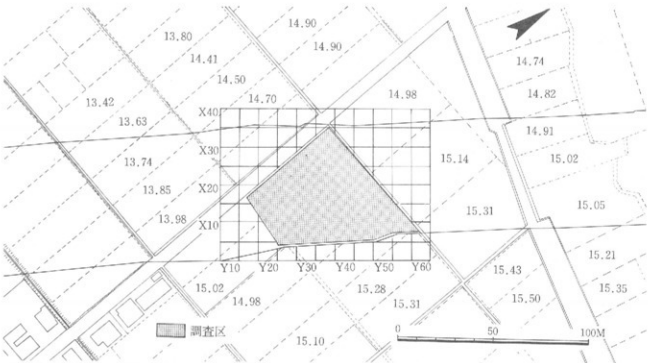


第5図 土層基本図

1 層耕作土
2 層床土
3 層暗黒褐色砂層
4a層褐色砂層
4b層暗黒褐色土層
5 層暗黒褐色砂層(弥生～古墳時代遺物包含層)
6 層褐色砂層
7 層青色粘土層
8 暗黒褐色粘土層(弥生時代中期遺物包含層)
9 地 山

B 遺 構

検出した遺構は，建物・溝・土坑・焼土などである。遺物を伴う遺構は少なく総数の約3/4は，遺構検出面および覆土などから所属時代を推定した。また，伴出した遺物などから，明らかに



第6図 地形及び区割図（S=1/2,000）

弥生時代に属する遺構は，図版７に，中・近世に属する遺構および，所属時代を決定しえない遺構を図版８に示した。

弥生時代の遺構（図版７）

建物四・溝九・土坑三・焼土一を検出した。建物には，１間×１間のもの三棟，２間×１間のもの一棟がある。

ＳＢ21は，２間×１間の建物で，桁4.2m×梁行3.2m（1.6×1.6）の六本柱の建物，柱根は，地山面で検出でき，二本が残存し，掘り方底面から30cmほど地山面に食い込む。形状は，丸柱で約60cmが残る。また，根本には，幅約２cmのえぐり込みを施す。

ＳＢ22は，１間×１間の四本柱の建物で，地山を約15cm掘り下げた面で四本の柱根を確認した。柱根は，丸柱でＳＢ21同よう地山に食い込み，残存部は，約80cmを測る。

ＳＢ24・25は，遺跡南側で検出した（図版９の１）。柱穴は，１ヵ所で三～四個重複し，計十四個認める。両者は，ほぼ同一のプランで二～三回の建て変えが行われたと思われ，ＳＢ24がより古い。また，柱根は，丸柱で全体で六本が残る。この建物の中央部に位置するＳＫ32は，いずれかに付随すると思われる。

土坑ＳＫ31・34・焼土ＳＸ36は，建物の周囲にみられ，いずれからも弥生時代中期の土器が出土した。

弥生時代に属する溝は，７層に似た青色粘質土と６層に似た褐色の砂層が交互に覆土に入る（ＳＤ10・11・13・16・18・20）と，３・５層に似た黒褐色砂層を覆土にもつ（ＳＤ14・15・19）がある。流路は，一定しないが概して東西に流れる。

ＳＤ10は，南東から北西に流れる溝で，溝内には，杭・矢板などが打ち込まれている（図版39の１）。

ＳＤ03～06は，覆土に青色粘質土と砂層を交互にもつ溝で，弥生時代の遺物が流路内の深みや穴などの中に流れ込んだ状況で出土する。この溝は，遺構掘り込み面を６層より上面にもつ。また，ＳＤ03・04は，弥生時代中期の土坑ＳＫ31・34の上面に流れ，中・近世の溝とは，覆土を異にする。このことから，弥生時代後期～古墳時代前期に属すると考えられる。溝ＳＤ07・08・12・19は，黒褐色砂層を覆土にもつ。遺構検出面は，ＳＤ07・08をのぞき６層上面であり，弥生時代のものと考えたい。また，ＳＤ07～09は，４層上面に検出面をもつ。

中世の遺構（図版８・９の２・10）

建物・溝・穴を各一ヵ所ずつ検出した。ＳＢ23は，南北に長軸をもつ２間×２間6.7m（3.2×3.5）×6.3m（3.0×3.3）の総柱建物で，間尺にはばらつきがある（図版９の２）。柱穴は，七ヵ所で検出し，うち三本に心持ちの丸柱が残る。

ＳＫ29は，遺跡西側で検出した直径約70cmの穴で，覆土に炭化物を含む（図版10）。中からは，河原石数個と曲物の底板・炭化米を出土した。ＳＤ02は，遺跡南端を流れる溝で幅1.5m，深さ50cmを測る。遺物は，総じて少ない。

近世の遺構（図版８・９の２・10）

溝・井戸・土坑がある。溝ＳＤ01は，北から南に流路をもち，弥生時代の遺物包含層および遺構を切る。

井戸ＳＥ35は，直径約１m，深さ40cmの石組み井戸で石組みは，底２段が残る（図版10）。その深さは，現地表面から約１mを測る。

土坑ＳＫ26は，３m×２mの竪穴状遺構で西側約½を調査した。出土遺物は，近世陶器・漆器片などがある。近世の遺構は，調査区の東側に集まっており，宅地跡などが東へ広がっていると推定できる。所属時期は，出土する越中瀬戸から江戸時代後半と思われる。

C　出土遺物

遺物は，弥生時代中・後期の土器が主体をしめるが，遠賀川式土器や石器（砥石・サヌカイト剥片）・木器（杭・矢板・杵根）が出土している。また，縄文時代晩期末の土器，古墳時代前期に属する土師器，平安時代に属する須恵器，中世に属する珠洲・土師質土器・木器（曲物底板）・炭化米，近世に属する越中瀬戸・伊万里など陶磁器類・漆器片・下駄などが少量ずつ出土している。また遺物量は，全体として少ない。　（酒井重洋）

4. 中小泉遺跡

A 層　序

遺跡全体にみられる上層は，1層水田耕作土・床土（約20～30cm），2層灰黒色粘質土，6層地山層の三層である。2層はさらに2a層灰黒色粘質土（約10～20cm），2b層暗灰黒色粘質土（約5～20cm），2c層（部分的に存在し，2b層より黒味が強い）に細分した。他に散在的ではあるが，3層灰茶褐色砂質土，4a層茶褐色粘質土，4b層明茶褐色粘質土，5層漸移層（青灰色・暗青灰色粘質土）が観察できる。

2層は中世の遺物包含層で，若干近世の遺物が混じる。4層は弥生時代の遺物包含層で，溝等の遺構覆土上層にあたり，湿原植物と思われるものが，未分解の状態で上層内に存在する。

6層地山層（青白色粘質土）は調査区の北端部で砂質土層に移行している。また用水路をはさんだ北側の地山層も砂質土で，2層等の土層はなく，砂層中に炭化した自然木（流木か）が見られた。なお地山層はほぼ平坦で，北西方向にやや傾斜しており，最大80cm前後の比高差が見られた。

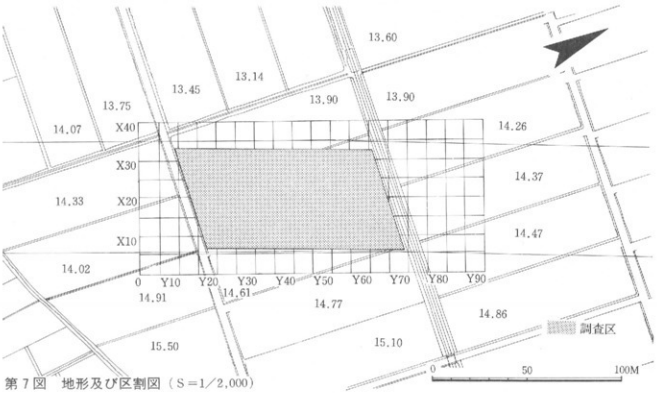
B 遺　構

検出した遺構には，弥生時代と中世に属するものがある。

弥生時代　溝及び溝内に構築されたシガラミ。土坑，穴を検出したが，住居跡やそれに相当する遺構等はなかった。溝は大溝を中心に中・小の溝が東西方向に並流し，複雑に切り合う。

大溝ＳＤ33は幅4.5m，深さ1.1mを測り，ＳＤ46からつづくものと思われる。ＳＤ39は幅3.5m，深さ1.1mを測り，シガラミの西側で溝幅が狭くなる。シガラミから約2m西側の溝肩部より，径7.1cmの小形仿製鏡が単独で出土した。完形品で，保存状態は良好であった。

中溝ＳＤ27は同一溝の二ヵ所にシガラミを構築しており，上流で幅1.5m，深さ20cm，下流で幅2.5m，深さ70cmと変化している。ＳＤ35は幅2.0m，深さ1.2mを測り，北端に一段深い掘り込みを持つ。ＳＤ36は幅1.5m，深さ1.2mで，ＳＤ37と平行して西流するが，時間的にはＳＤ37より新しい。



第7図　地形及び区割図（S＝1／2,000）

小溝ＳＤ37は大・中溝と同ように西流する長い溝である。他は全般的に短く，途中で止切れるものが多く，幅は約0.5～1.5ｍで，深さ約10～50cm前後と浅い。

溝の切り合いは（ＳＤ37・39・46→ＳＤ36→ＳＤ40），（ＳＤ43→ＳＤ36・37），（ＳＤ27→ＳＤ33）となっており，時間的前後関係がうかがえる。また溝の時期は覆土内遺物より後期に属するものと言える。

シガラミ（図版12・13）四ヵ所で検出した。ＳＤ27東側のシガラミは，幅1.5ｍ，高さ30cmで，又振・板材・角材を組合せて構築しており，全体を安定させるため数本の角材を溝底に打ち込んでいる。木材部を芯として粘質土で堤を築き，水を塞き止め，水流をＳＤ32方向へ変えていたと推察できる。

ＳＤ27西側のシガラミは，長さ３ｍほどの角材を溝に直行させ，それに板材・角材を斜めに打ち込み，立て掛けている。高さは40cmあり，粘質土の堤を外部から補強したものと思われる。東側60cmに１段低い木組があり，これもシガラミかもしれない。なお水流を塞き止めてどの溝へ流れを変えたかは不明であるが，水を貯えるだけの施設であったかもしれない。

ＳＤ33のシガラミは，直径30cm，長さ2.7ｍの自然木を中心に，両方向から角材を斜めに打ち込んで立掛けている。高さは40cmで，溝底よりやや浮いており，ある程度溝が埋った時点で設けられたと思われる。水流については，ＳＤ27西側シガラミと同よう不明であるが，ＳＤ33と直行せず，平行に近い角度で存在している点と，他のシガラミと異なり砂質土層の上に構築されていること等により，水を塞き止めえたかどうか多少疑問が残る。

ＳＤ39のシガラミは直径30cm，長さ３ｍの自然木を上部におき，底より10cmの所に直径15cm，長さ２ｍの枝材を渡し，それに直径10cmほどの枝材を斜めに打ち込んで立て掛けている。高さは70cmありＳＤ27西側シガラミ同よう粘質土の堤を外部から補強したものと思われる。塞き止めた水はＳＤ37に流し込んでいたと見たい。またＳＤ27東側シガラミも含めて，深い溝から浅い溝へと水流を変えるため，シガラミを設け，水位を高める必要があったのであろう。

以上大小の溝とシガラミは，灌漑用の水路・水位流路調節用の施設と断定できる。これらの遺構を，粘質土地帯（6層・湿地）に築造した点も含めて推察すれば，調査区域内で検出できなかった水田跡が，周辺に存在する可能性が強い。

穴及び土坑は四ヵ所で検出した。ＳＫ59の平面形は４×３ｍの楕円形で，深さ80cmを測る。他の土坑は全般に約10cmと浅く，性格は不明である。時期は遺物からみて後期に属する。

その他の遺構で，ＳＤ03～22の溝は遺物が出土せず，溝内覆土が弥生時代の溝覆土にやや似るが，時期決定するには至らなかった。

中世　溝及び井戸を検出した。ＳＤ01は幅７ｍ，深さ90cmを測る大溝で，自然河川と思われ，幅１ｍ，深さ20cmのＳＤ02が流れ込む。時期は珠洲第Ⅳ期（南北朝）〔吉岡1976〕に位置する。ＳＤ04は調査区域北東隅でほぼ直角に折れて西流し，幅２ｍ，深さ20cmを測る。出土遺物には下駄・箕があり中世に属する。ＳＥ52は径４ｍ，西側に３ｍの張出しがあり，井戸と思われる。発掘中の湧水と地山層下が砂質土層で崩壊するため，底面は検出できなかったが，機械掘りでおよそ４ｍ近い掘り込みを持つと確認できた（ＳＥ51・53も同よう）。井戸枠は検出できず，なかったものと思われる。時期は珠洲第１期（鎌倉時代）と思われる。ＳＥ51・53は遺物を含まない。しかし，覆土がＳＥ52に類似しており，中世に属すると考えておく。

Ｃ　遺　物

弥生時代のものとして土器，蛤刃石斧，小形仿製鏡，弓・又鍬・板材・角材等の木製品があり，弥生時代後期に比定できる。ただＳＤ33覆土より出土した高杯脚部２点は前期に属するものとして注目される。

中世のものとして第Ⅰ・Ⅳ期の珠洲があり，他に土師質小皿，青・白磁，下駄・箕等の木製品がある。

なお若干ではあるが，ほかに奈良～平安時代の須恵器，近世の陶磁器類がある。　（狩野　隊）

5. 飯坂遺跡

A 層　序

飯坂遺跡は南北150mにわたる広大な遺跡であり，土層の堆積状況は地点により異る。地点ごとの差異を捨象して基本的層位を示せば，1層耕作土，2層暗褐色粘質土，3層黒褐色粘質土（中世の遺物包含層），4層暗灰色砂質土，5層黒色砂質土（弥生時代遺物包含層），6層淡茶色粘質土となる。そして4層の上面が中世の，6層の上面が弥生時代の遺構形成面である。

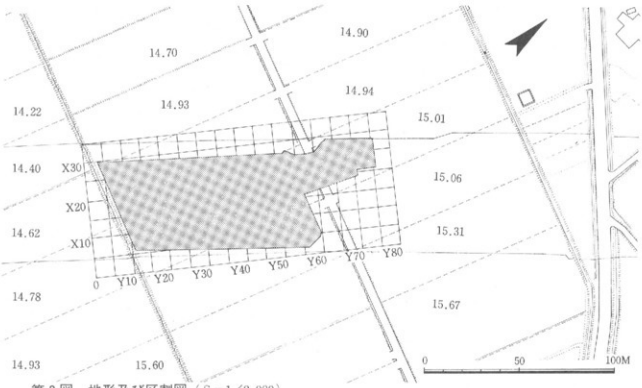
B 遺　構（図版16・17）

検出した遺構は，弥生時代と中世の二時代に属する。弥生時代に属するものは溝と方形周溝墓群，中世は溝と土坑である。

弥生時代の遺構　方形周溝墓九基と大小の溝がある（図版17）。方形周溝墓の大半は，互いに接して存在する。以下，1～9号墓と略して述べる。1号墓はほぼ全体を検出した。外径6.5m×7.8m，内径約5mで，東北隅と一部未調査の南西及び北西隅にも陸橋部をもつ。南北に主軸をおく長楕円形の主体部を中央にもつ。全長2.2m，幅65cm，深さ5cmをはかる。2号墓は，東側の墳端と周溝を検出した。周溝から，外径約10mの規模と推定される。

3号墓は，9基中で最大の規模をもつ（図版46の1）。外径は南北20m，東西17m以上，内径10.5mである。周溝は隅円方形を呈し，幅4mと広いが，深さは10cmときわめて浅い。西辺は2号墓及び4号墓の周溝と重複しているが，後二者との新旧関係は不明である。墳丘をとどめており，その高さは周溝底面から76cmをはかる。墳丘のほぼ中央で主体部の基底部を確認した。主体部は180cm×83cmの長方形である。底面の一部に暗赤褐色の酸化鉄の痕跡がみられた。墳丘の北側斜面から壺が，南西及び南東隅の周溝内から高杯が出土した。また，墳丘の盛土の下層に厚さ10cmの黒色土層がみられたが，方形周溝墓の築造に先行するこの層は，天王山式系統の土器の単純包含層である。3号墓で確認できたこの層位関係は，この土器の編年的位置づけを行う上で大きな発言力を有している。

4号墓は，東半部を調査しえた。外径12m，内径7mと推定される。周溝は幅約2mで，深さは南辺では50cmと深



第8図　地形及び区劃図（S＝1／2,000）

い。墳丘が認められ，地山からの高さは40cmである。主体部は，幅90cm，深さ30cmで，全長は不明であるが箱形木棺と推定される。５号墓も東半部のみを調査した。周溝の北辺は４号墓と重複しているが，二者の新旧は看取できない。東辺は墳端を６号墓の周溝に切られており，後者の方が新しい。規模は内径が４ｍ以上，外径は不明である。

６号墓は，外径６ｍ，内径４ｍで，東西に陸橋部をもつ。周溝の西辺は８号墓と重複する。７号墓は，外径７ｍ×８ｍ，内径約５ｍで，不整形な方形プランをもつ。西側・北側の二ヵ所に陸橋部がある。周溝は深さ50cmをはかり，断面はＵ字形に近い。８号墓は，外径12ｍ，内径７ｍで，整然とした方形プランをもつ。南東と北東の二ヵ所に陸橋部をもつ。９号墓は外径約９ｍ，内径約６ｍで，北西と南西に陸橋部をもつ。６～９号墓の主体部は不明である。

調査区の北端には，幅３ｍ，深さ1.5ｍの西流する大溝ＳＤ26がある。弥生時代後期の土器が出土しており，方形周溝墓と同時期の所産である。ＳＤ26と３号方形周溝墓の間には，ＳＤ22～25・27が縦横に走っている。ＳＤ27が上記のＳＤ26に切られていることから，これらは方形周溝墓に先行する可能性が大きい。なお，ＳＤ23としたものは，方形周溝墓の可能性を多分にもっている。だとすれば，３号墓に溝を切られているＳＤ23は，３号墓ほかの方形周溝墓に先行するものとみなされる。

確認できた九基の方形周溝墓は，調査区の北西の一角に群をなして存在する。この一帯には住居跡が全くみられない。居住域から隔絶された墓域とみなしうる。この墓域は，上記のＳＤ26によってその北限が画されている。また，近接して存在するが，これらはいずれも弥生時代後期に属している。方形周溝墓は相前後して順次築造されたものといえる。これらの方形周溝墓は，規模の差異から大きく三つに大別できる。すなわち，外径が17ｍ以上のもの（３号墓），10ｍ以上のもの（２・４・８号墓），10ｍ未満のもの（１・５～７・９号墓）である。とりわけ３号墓は，卓越している。この差異は，単なる数値の違いにとどまらず，被葬者の性格の相違を端的に反映していると考えられる。

各周溝墓の主軸を南北にとって方位に照らしてみると，大きく二つの群に分れる。一つは磁北にほぼのるか西へ15°以内振れているもの（２・４・８号墓），一つは東へ15°ないし25°振れているもの（１・３・９号墓）である。このうち主軸を西へ振る２・４・８号墓が，共に同規模であって，一致している。この三基はいずれも幅の広い周溝をもち，全体の形状も整然としており，他の面においても一定の共通性を見出しうる。他方，形状が不整形なものとしては，６号墓・７号墓のような小型のものと，３号墓のような大型のものとがみられる。このような傾向の違いが築造の時間差，性格差と関連性を有しているか否か，今後の検証課題としたい。

中世の遺構

分布範囲は，調査区北東のＸ46～60，Ｙ１～13区にほぼ限定される。この範囲に，八本前後の南流する溝が複雑に交差・重複してみられる。溝は氾濫をくりかえし，流路が重複したようである。ＳＤ14から漆塗りの椀が出土している。ＳＤ10～17は，出土した珠洲から室町時代に形成されたものと考えられる。ＳＢ18は，２間×２間の掘立柱建物で，五ヵ所に柱根をとどめていた（図版44の３・４）。桁行4.2ｍ（14尺），梁行3.6ｍ（12尺）で，各柱間は等尺である。中世と推定される細い溝ＳＤ17を切って柱が建てられており，中世ないしそれ以降のものと考えられる。

上記の溝・建物から離れて，調査区の北端に一辺11.5ｍのほぼ正方形の溝ＳＤ21がある。東側の辺の一ヵ所が，方形周溝墓の陸橋部のようにとぎれている。層位からみて中世のものと考えられる。

C　出土遺物

調査区の南東隅では５層から微量の縄文土器が出土した。晩期初頭の八日市新保式，晩期末の滑日新丸山Ａ式である。方形周溝墓に伴う後期の弥生土器，方形周溝墓の築造に先行する天王山式系統の土器，７世紀初頭，８世紀後半の須恵器，第Ⅳ期の珠洲，漆器。

（岸本雅敏）

6. 江上A遺跡

A 層 序（図版24）

地山面（遺構確認面）まで，約90cmの深さがあり，八層を数える。1層水田耕作土（20cm），2層暗褐色土（20cm），3層黒色土（20cm），4層黄白色砂質土（5cm），5層灰色粘質土（5cm），6層茶黒色土（5cm），7層褐色粘質土(15cm)である。7層は場所によって黄味の強い所があり，弥生時代の遺物包含層にあたる。地山面より下位は青灰色粘質土と灰黒色粘質土の互層が続き，約50cmで砂礫層に至る。地山土には，自然木，クルミやトチの実が混じる。

B 遺 構（図版18～24・第47～53，表5～8）

建物，柵，環状溝，溝，橋，井戸，穴がある。6層からの掘り込みをもつSD12を除き，すべて弥生時代後期に属する。

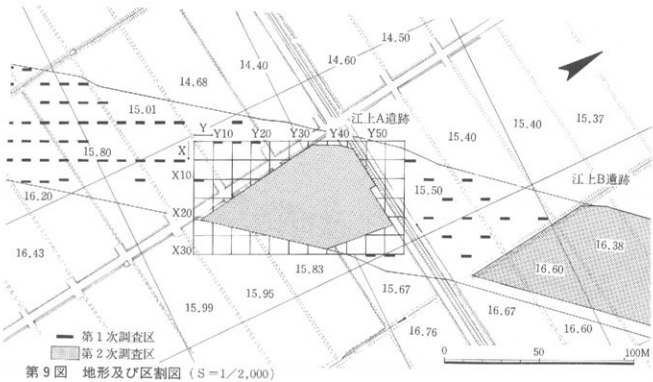
建物 （図版19・20）

柱根を残すもの六，柱穴だけのもの一がある。相互に切り合いは認められない。柱根は，わずかの例を除いて，地山面より上部は腐って残らない。柱穴は，柱根の大きさと同じであり，余分な掘り方を残すものは少ない。柱間や柱根の形状に，共通した特徴を有するものがある。1間×1間のもの四（SB14・15・18・19），2間×1間のもの二（SB17・20），2間×2間のもの一（SB16），柱根の形状では，丸柱のもの二（SB14・18），角柱のもの三（SB17・19・20），丸柱，角柱両方を用いるもの一（SB16）がある。

柱根は，手斧のはつり痕跡をよくとどめ，丸柱・角柱ともに割材を用いる。

SB14・18は，径約30cmの太い丸柱を，SB19は一辺12cmの細い角柱を用いる点で異なるが，柱根の長さが約50cmで共通する。SB14は礎板をもち，幅約2mの馬蹄形の溝SD03で画され，その内側は，隅のまるい方形の区画となっている。[注1] 区画内の穴P_2・P_3から，ヒスイ・碧玉の剥片が出土している。炉跡や土堤は残っていない。

SB18の北東隅柱は，細い角柱二本を添えている。SB15は，柱根を残さない。



第9図 地形及び区割図（S＝1／2,000）

ＳＢ17・20は，一辺約16cmの太い角柱を用い，長さが約80cmと深い点で共通する。ＳＢ17は建物の長軸に対して，同等の柱根が三本ずつ相対するのに対し，ＳＢ20は，短軸に対して三本が相対し，南側中柱だけが長さ30cmと短いことで違いを認める。ＳＢ17の南西隅柱は東方へ傾き，ＳＢ20の北側中柱は南東方へ大きく傾く。

ＳＢ16は，径（辺）約15cmの丸柱・角柱両方を用い，長さ約50cmである。すべてに底から20cm上位に，幅約３cmの溝状のえぐりを施す。えぐりは，すべて西方に面する側にある。北側，南側の中柱は，他の柱根に比べ細く，根元に木片を添えている。

棚　（図版18・20）

柱間１間のもの二（ＳＡ21・24），２間のもの二（ＳＡ22・23）がある。すべてＳＢ16とＳＢ17の間にあり，ほぼ東西にのびる。

ＳＡ21は，ＳＢ16の南側に接し，軸がわずかに東へずれる。柱根は，径16cmの丸柱を用いるが，えぐりはない。ＳＡ24は，ＳＢ17の北側から約2.7ｍの間隔をおいて並ぶが，わずかに西へずれる。柱根が長く太い角柱を用いることはＳＢ17と共通する。

ＳＡ22・24は，いずれも柱根を残すものが少ない。ＳＡ22は角状の木片がはいっていることで，ＳＡ24は棒状の木片がはいっている点で，それぞれ共通した特徴をもつ。ＳＫ36が棒状の木片をもち，ＳＡ23の特徴と似ており，Ｌ字形に曲ってつながる可能性がある。ＳＫ36には，地上部分が丸く，地中部分が杭状に尖がる柱根が残る。ＳＡ22の東端柱穴は，ちょうなの削り屑がつまっている。

環状溝　（図版21・22）

幅約２ｍの広いもの一（ＳＤ03）と幅約30cmの狭いもの三（ＳＤ04・05・06）がある。

ＳＤ03は，底面が平坦な馬蹄形を呈し，ＳＢ14の周溝である。東側の幅約３ｍの掘り残しは，ＳＢ14の出入口部となる。ＳＤ01に接続し，水の出入りがある。出土遺物に，勾玉・管玉など玉類の原石・完成品・未完成品，砥石が多い。

ＳＤ04は，「８」の字形を呈し，方形の区画を二つつくる。溝から多くの炭化米が出土している。西側の溝から，ＳＤ02へつながる溝がわかれる。ＳＤ05は，三本の溝からなり，溝に切り合い関係は認められない。内側にやや西へ張り出す方形の区画をつくる。東側に幅約４ｍの掘り残しがあり，出入口部とみられる。ＳＤ06は，径2.5ｍの方形区画をつくる。ＳＢ15との間に重複関係があるが，新旧は不明である。

溝　（図版24）

ＳＤ01は，調査区中央部をわずかに蛇行しながら北流する幅約４ｍの大溝である。北側で二又にわかれるが，合流するのか，分流するのかは明確でない。覆土は基本的に７層褐色粘質土が入り込むが，間に三枚の砂層が認められる。

ＳＤ02は，幅約0.6～1.5ｍで，東流し大溝ＳＤ01へ接続する。

ＳＤ09は，南北方向の浅い幅広の溝で，柵ＳＡ22・23・24の西側を画する。

ＳＤ08・10・13は，幅約30cmの小溝で，ＳＤ08・13は南流して，ＳＤ02へ合流し，ＳＤ10は，西流してＳＤ01に合流する。

註１　ＳＤ03の覆土①層灰色粘土層は他の溝にはなく上場の土の流れ込みの可能性がある。

橋　（図版23・49）

ＳＸ25は，ＳＢ17の東方でＳＤ01にかけ渡した橋である。残存長約３ｍ，幅60cmで，厚さ約３cmの板を三枚組み合せ，中央部を下から三本の杭で支えている。北側と中央の板は，四ヵ所に対になる方形の穴が穿たれている。とじあわせの穴とみられるが，とじ紐などの痕跡は認められない。南側の板は，中央の板と重なり合う部分があり，とじ穴も認められない。橋は，中央部が弓状にたわみ，それを支える三本の杭は，板をつきぬけている。杭は，溝の底面よ

り浮いた状態で，溝がある程度埋った段階で設置されていることがわかる。板の両端は腐り，荒れており，岸際の構造は不明だが，地山面とほとんどかわらぬ面で水平になり，地山に直接置かれたものとみられる。

井　戸　（図版22・50）

ＳＥ26は，径約１ｍの円形の掘り方を設け，中央部に径35cmのほぼ円形の木枠を置き，周囲を埋めたものである。木枠は，厚さ３cm，長さ65cmの樋状の刳り木を二枚合せた円筒形で，外面は，幅４cm，長さ７cmの手斧目が残る。内底面には，中央に四角の穴を穿った鉢形の木器を沈めている。底面は礫層に達し，今も水が湧き出す。

その他の遺構

建物あるいは柵にまとまらない柱穴がある。ＳＫ43は一辺９cmの角柱，ＳＫ41・46・47は杭状の柱根が残る。ＳＫ32は，径10cmの丸柱が柱穴内で横転している。ＳＫ39には，白色粘土がつまり，ＳＫ29ではヒスイの剥片が出土し，橋付近のＳＤ01からまとまって砥石がみつかっており，もう一つの玉生産に関わる遺物の多い一画をつくる。

遺構の配置　（図版18）

建物は，静岡県登呂遺跡・山木遺跡の成果に照らせば，1間×１間の建物は土間住まいの竪穴住居，２間×１間，２間×２間の建物は，板床を持った高床倉庫と考えられているものに共通点が多い。〔日本考古学協会編1954，後藤守一編1962〕。それぞれの実際の用途は別にしても，上屋構造に大差はないと思われる[註2]。

柵は，ＳＢ16とＳＢ17の間に集中し，他に単独の杭の打ち込みが認められること等から，野外の作業場とみられる。環状溝は，その内側を，掘立柱にしない上屋を架して使ったものとみられ，多くは倉庫と考えたい。

遺構は，自然河川的な大溝の両岸に，整然と配列する。西岸の遺構はさらに，北側と南側を溝によって画され，環濠集落を思わせる。東岸には，ＳＤ05，ＳＢ20があるが，大溝にかけられた橋によって，西岸と結ばれている。遺構は，ほとんど重複せず，同時期に存在し，相互に有機的な関係をもった，弥生時代後期の集落跡である。

註２　ＳＤ03の内周に沿って幅２ｍの土堤がめぐれば，登呂遺跡の住居跡に規模・柱間が同一のものがある。山木遺跡の高床倉庫の柱と考えられるものは，地中部分が１ｍ近くあり，ＳＢ17・20の柱根に共通している。ただ柱根の太さや柱間の長さに少しずつ違いがあり，住居跡の中に倉庫として使われたもの高床の建物でも住居であった場合も考えられよう。今後の課題である。

Ｃ　出土遺物

溝内を中心に約10,600点の木器・加工痕跡を残す自然木が出土している。鍬・鋤・えぶり・田下駄などの農具約80点，弓・鏃形木器・火熕臼・火熕杵・紡錘車・臼・杵・琴柱・はしご・ネズミ返し・槽・杓子・斧等の柄・各種の建築材・籠・編物など日常生活全般にわたるものがある。用途の明らかでない木器も多い。

石器は，砥石，磨石など玉生産に関わるものが多く，石斧残欠（たたき石に改変）が二点出土しているだけである。鉄器は検出されなかった。

玉は，ヒスイ・滑石の勾玉，碧玉・鉄石英の菅玉，水晶の小玉がある。約30点の完成品，未完成品があり，原石，剥片も数多く出土している。

土器は，ほぼ完形に復原されるものが200点以上に及び，甕・壺・長頸壺・鉢・高杯・器台・蓋などの器種がある。ミニチュア土器も多い。時期は，数点の天王山式系統の土器が混在するが，弥生時代後期（畿内第Ｖ様式）にほぼ限定される。また，炭化米，ひょうたん，瓜の種子など植物遺体も出土している。

他に，須恵器，珠洲，越中瀬戸など古代・中世・近世の陶磁器が若干見つかっているが，ほ場整備以前の用水路に混じるものである。

（久々忠義）

7. 江上B遺跡

A 層 序

X５Y40とX35Y50とを結ぶ線を境にして分ければ，その北半分は，地表から20cmで地山４層(淡黄褐色砂質土層)に至り，表土層（１層），灰色粘質土層（２層）の二層が堆積する。南半分は40cmで地山に至り，１層，２層，黒色土層（３層）の三層が堆積する。北半分に３層が見られないのは，ほ場整備により，削平・地均しを受けたためである。地山は，北及び北西方向に傾斜を持つ。

B 遺 構 （図版25～32，54～59，表９）

検出した遺構は，大きく見れば，弥生時代と中世の二時代に分かれる。

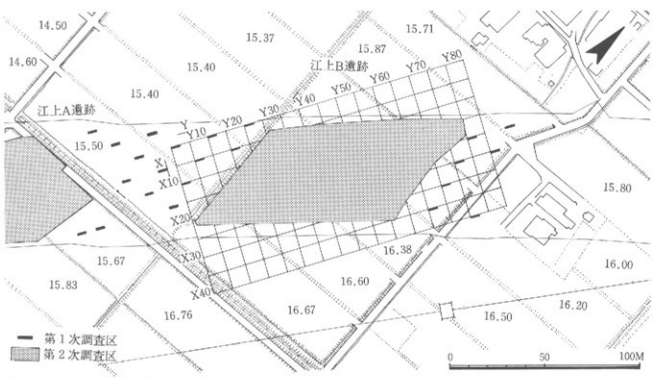
弥生時代の遺構としては，建物一棟，溝二十六条，穴四個があり，中世のそれは，建物十三棟，溝十五条，穴十一個，木柵施設がある。その他の時代のものとして，近代以降の溝五条と時代不明の建物三棟・溝十六条・穴八個がある。

弥生時代の遺構

建物（図版27） ＳＢ111は１間×１間の建物で，柱間は南北4.5m，東西４m，4.4mを測る。柱穴の１つに礎板を残す(図版59)。建物の周囲を溝ＳＤ020が巡っている。ＳＢ111は，竪穴住居である可能性が強い。そうであれば，住居の掘がＳＤ020に接し，その内径は，17m×16.4mを測る。その面積は，約214㎡となり，極めて長大な床を持つことになる。東側では，溝が一部消失しており，住居の入口であるかもしれない。また，西方に，南5.1m，東西1.6mの略台形の張り出し部を持つ。これも，この建物に付随する施設であろう。

溝（図版32） 弥生時代の溝は，検出された溝数の約半数を占める。[訂1] 大多数の溝は，遺跡の北半分にある。溝の多くは，北及び北西方に流れ，大きな溝ＳＤ008・030・032の流路に繋がっていく可能性がある。溝を幅によって分けると，50cm以上のもの五，50～20cmのもの九，20cm以下のもの十となる。深さは，50cm以上のものが008・030・032，30～20cmのものが012・015・019・020で，その他は20cm以下である。

ＳＤ030は，幅３m，広い所で７mを越し，90cm近い深さを持つ。平面上では，一条の溝に見えるが，断面には，二



第10図 地形及び区割図（Ｓ＝1／2,000）

回の流路が確認できる。東流する流路は，X25Y43付近で二条の流れとなる。一番新しい流路は，幅2.5m，深さ20cm程であり，SD020と接する付近に溜りが見られる。SD032は，幅80～140cm，広い所で2.3mあり，深さ20～40cmを測る。北西に流れるSD052は，コの字状に内を区切る場所を作る。溝の内側は，南北4.7m，東西6mであるが，柱穴等は見あたらない。断面は，U字形である。SD019もコの字状に屈曲し，内側は，南北6.8m，東西8.4mであり，U字形の断面をもつ。SD020は，SB111を取り囲む環溝で，U字形の断面をもつ。

穴　覆土中より弥生土器を出した穴は四個で，大きさもSK051以外は，1m以内である。深さは，35cm前後のものSK011・051と10～15cm前後のものSK055・091がある。

中世の遺構

建物（図版26～29）　復原できた建物は，十六棟であるが，うち十三棟が，中世に属する[註2]。SB112・113・116・123の四棟以外は，全て総柱の建物である。総柱でない四棟の梁行は，全て2間である。SB121以外は，全て完数尺(1尺＝30cmとする）で柱間をとる。柱間は，SB117の10尺3寸以外は，全て10尺を越えない。柱間が10尺のものは，SB119・124で，全て総柱の建物である。方位は，磁北から東へ2～11度振れた中に入る。建物の七割近くを占める九棟は，梁行2間である。梁行が3間を越えるものは，SB118・120～122の四棟で，全て総柱の建物である。柱根が遺存した建物は，SB112・116・117・120・121・122・124の七棟で，多くは，角柱を用いている[註3]。

建物を場所ごとに見ると，六つのまとまりに区分できる。第1群はSB112・113，第2群はSB114～116，第3群はSB117，第4群はSB118・119，第5群はSB120～122，第6群はSB123・124である。それぞれ，第1群は東西棟，第2群は東西棟，第3群は南北棟，第4群は南北棟，第5群は東西棟，第6群は南北棟の建物である。しかも，各群内の建物の方位のずれは，第2群以外は，3度内のずれに収まる。第1群，第2群，第3～5群，第6群は，溝に区画された配置を示す[註4]。

第1群は，側柱の建物である。SB112とSB113の柱穴が切り合っているが，SB112に柱根が残っていることから，SB112の方が新しいと考える。第2群に属する三棟の建物の新旧関係は分らない。しかし，SB116は，総柱の建物でなく，柱根を残し，9尺の柱間を用い（SB114・115の柱間は8尺），しかも，総柱でない第1群の建物の方位に近い。さらに，第2群の溝区画内の広さは，南北13.5m，東西21.5m（面積は約9反）あり，第1群の溝区画内の南北（SD016とSD014の間で，東側は未掘）の幅が15mであり，第2群に平行して並ぶ。第1群に属する二棟の建物のいずれかに決しえないが，SB116は，第1群の建物と同時に存在したと予想される。第5群の建物は，全て総柱の建物である。柱穴の切り合い関係から，SB121が最も新しい。SB120とSB122は，切り合い関係がないので，新旧関係が明確でない。しかし，規模が小さく，庇もしくは塀を持たない建物が新しいものとすれば，SB120→122→121と順次建て変えたことになる。第6群の建物は，共に同じ方位を示し，第4群のSB119とも同じ方位である。SB123の東側の柱列を延長するとSB119の西側の柱列に合う。その間の距離は，220m（約122間）である。また，SB123とSB124の距離は，120m（約67間）である。

溝（図版32）　中世の溝は，弥生時代のものに比べて，企画性がある。大部分は，北及び西流し，遺跡の北半分にある。深さは，弥生時代の溝に比べて，総じて浅い。深さ50cm以上の溝はSD014だけで，深さ20～30cmのものは，SD016・033・070で，その他のものは深さ20cm以下である。幅は，1m以上のものがSD001・014・018，50cm以下のものがSD026・036で，その他は，50cm～1mである。弥生時代の溝と同様に，幅の割りには深さが浅い。断面は，逆台形が多い。SD014・020・037は，建物群の周囲を環状に巡り，それらの遺構と直接関係ある溝である。

SD014は，最低二回の流路が確認でき，新しいものは，礫を含んでいる。SD016は，底が三条の溝であるが，遺構検出面では一条の溝となっており，最新の溝は，一条の溝としてSD014に流れ込んで行く。SD018は，SD014の新しい流れによって切られているが，SD014と018とは，同時に存在していたものである。SD033は，未掘の部分

があるが，溝は，方形に巡っている。その内側を推定すると，南北６ｍ，東西3.9ｍである。覆土中より折敷，近くから馬の歯が出土している。[註5]（図版30）

穴（図版30）　平面形で類別すると，円形のものＳＫ041，042，095，106，楕円形のものＳＫ092，093，094，長方形のものＳＫ038，084，不定形のものＳＫ007，008となる。平面が長方形を持つ穴は，長軸が１ｍを越える。これに属するＳＫ084からは，描粉木が出土している。ＳＫ007は，幅３ｍ近く，深さ40cmで，中に木の葉・箸が多数入っていた。ＳＫ106は，北宋銭約五百六十枚を入れた珠洲甕を埋めた穴である。この穴は，第１群，第２群のどの建物に伴うのか分らないが，溝によって建物と画された場所にあり，しかも，建物群から北方にある。ＳＫ088は，木の根等の撹乱や別の穴が切り合っているため，平面が不定形に見えるが，元来は，楕円の平面形を示す。中から，ＳＫ106と同じ種類の北宋銭約十数枚が出土している。[註6]この穴も，溝ＳＤ106によって画された場所にあり，第１群の建物から北方に位置する。

木枠施設ＳＸ107（図版31）　東西1.3ｍ，南北1.4ｍの方形に組んだ木枠の中に，底を残す曲物が設置してあった。この木枠施設の中や下，及び付近の穴より，数千点を越える箸が出土している。木枠・曲物が下には，数cmの砂層を挟み，その下に穴がある。この穴の一つに，ＳＢ120の柱穴がある。この施設は，ＳＤ070の水を内に引き入れて溜めておく貯水の機能を果していたのであろう。この施設に伴う建物は，ＳＢ121もしくはＳＢ122と考えられるが，建物の新旧関係から考えて，より新しいＳＢ121であろう。しかも，ＳＢ121の屋内に取り込んでいる。あるいは，ＳＢ121が，箸の使用と何か関連あったのかもしれない。

その他の時代の遺構として，近代以降の溝が五条ある。ＳＤ053・056・071は，幅20cm，深さ10～15cmである。耕土下の暗渠であろう。ＳＤ066は，幅４～5.5ｍ，深さ40～50cmである。第５群の建物の柱穴を切っている。覆土中より，弥生土器，珠洲が出土している。この溝の南側に沿って弥生時代の溝が，一部残っていたことを遺構検出時に確認しており，この溝の一部と重複していたと考えられる。この溝の流路は，丁度，中世の溝ＳＤ014・018・037と同方向に流れており，中世においても流路があったものと推測される。

ＳＸ065とＳＸ078は，覆土中より弥生土器を出土しているが，共に平面が不定形で，深さも，10～30cm程であり，土器の出土量も僅かなので，自然に出来た窪みに土器が溜ったものであろう。

C　出土遺物

遺物は弥生土器，古式土師器，珠洲，中国製磁器，伊万里，越中瀬戸，打製石斧，碧玉，漆器，杓子，櫂粉木，折敷，箸，北宋銭，鉄製品がある。特に，箸は，八千点を越える。

弥生土器は，弥生時代後期に比定でき，珠洲は，第Ⅱ～Ⅳ期〔吉岡1976〕が多く，鎌倉時代中期から室町時代前期に属すると考える。

（宮田進一）

註１　弥生時代と中世との溝の区別は，一応，覆土の違い，出土遺物，遺構の切り合い関係より判断した。弥生時代の溝の覆土は，全体的に見て，黒色土と黄(褐)色砂質土との互層になっている。中世のそれは，黄(褐)色砂質土を含んでおらず，黒(褐)色土だけである。

註２　時代不明の建物ＳＢ126は，尺で柱間がとれ，方位もＮ－10°－Ｅであるので，この遺跡での中世の建物の基準に合致し，中世に属すると考えられる。ＳＢ125は，柱間が12尺もあり，方位の振れが中世のものと違っておりＳＢ111に近い方位をとる。もしかすると，弥生時代の建物であるかもしれない。ＳＢ127は，柱間が３ｍ以上もあり，他の建物とは違って方位が磁北より西に振れていることから考え，建物自体の検討を必要とするかもしれない。

註３　建物に付随する井戸は，発掘区内では，確認できなかった。

註４　ＳＤ066の一部に中世の溝の流路があった可能性があり，そうだとすれば，第３・４群と第５群は溝に画された配置をとる。

註５　ＳＤ033が区画する場所は，もしかすると，祭祀に関わった可能性がある。

註６　ＳＫ106の甕は容量に比べて銭の出土枚数が少ないので，もしかすると抜きとられているかもしれない。

8. 東江上遺跡

A 層　序

地表から遺構検出面までの深さは約45cmあり，その間に三層ある。1層耕作土，2層粘性淡褐色土，3層暗褐色粘質土であり，3層が遺物包含層である。その下の地山は淡黄褐色の砂質土で，調査区の全域にわたってほぼ平坦に堆積している。

なお，調査は富山地方鉄道の線路を挟む東西を対象とした。以下，この東西地区を東区・西区と呼びわける。

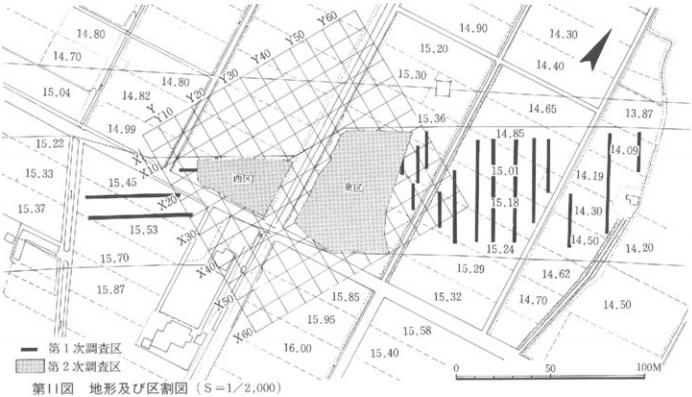
B 遺　構（図版33）

検出した遺構は，掘立柱建物・溝・土坑・焼土・井戸・竪穴遺構である。建物を主とする遺構の大部分は，出土土器が飛鳥・藤原宮の土器編年〔西1978〕の飛鳥Ⅳ期にほぼ該当することから，7世紀末のかなり限られた期間に形成されたものである。

西区の遺構と遺構配置　ＳＢ11・13は2間×2間のほぼ正方形の建物である（図版60の2）。前者では一ヵ所に礎板を，後者では三ヵ所に柱根をとどめる。ＳＢ12は3間×2間の総柱の東西棟で，柱根を残す穴三，礎板を残す穴一がある。礎板は狭長な板を井桁状に組んだ特異なものである（図版61の2）。柱根は北側へ傾斜するものが多い（図版61の4）。柱はすべて割り材である。ＳＢ14は3間×2間の大型の建物で，柱根・礎板は不明である。復原できた上記四棟の建物の柱穴は，径約40cmである。柱穴の重複は建物相互間にはみられず，建物の明らかな建て替えは看取できない。柱間は5・6・8尺のいずれかで割りきれ，また各棟ともにそれぞれの桁行・梁行の柱間は等尺である。

西区の建物群では，ＳＢ12を中心としてその南北にＳＢ11・13が，ほぼ等間隔に軒をそろえて配される。ＳＢ11とＳＢ12の間隔は6尺，ＳＢ12とＳＢ13の間隔は5尺である。これら三棟は，建物の主軸方位をほぼ同じくするだけでなく，東側の辺をそろえている。そして，その辺と並行して南北の柵ＳＡ15がある。柵の東側は柱穴も疎らとなっており，建物の存在を推定することはむずかしい。ＳＡ15は建物群の東側を画する塀と考えることができるだろう。

一方，上記三棟の西側には，前三者とは主軸方位を異にする南北棟の建物ＳＢ14がある。その西側には，ＳＢ14の



第11図　地形及び区割図（S＝1／2,000）

主軸と並行する細い溝ＳＤ03が南西へ一直線に伸び，西端の大溝ＳＤ05に達している。ＳＤ03の西北側には柱穴がみられず，建物は存在しなかったようである。ＳＤ03は建物群の西北側を画するとともに，建物群に伴う排水路として機能していたと考えられる。ＳＤ03の外側には焼土の詰まった浅い穴ＳＸ08・09がみられるのみで，居住域のはずれという感が強い。調査区の西端に，北流する大溝ＳＤ05（図版61の１）があり，溝の東側（建物群側）底面から須恵器大甕・杯が出土している。

四棟の建物は，東側のＳＡ15，西側のＳＤ03によって区画された空間の中におさまっており，整然とした企画性をもって配置，構築されている。少なくともＳＢ11・12・13は，同時に存在していたと認めてよいだろう。出土土器に大きな時期差が認められないことや，建物に重複・建て替えがみられないことは，これを裏づけている。また，遺存していた礎板・柱根の多くが上記の三棟に集中していたことも，こうした推定を裏づける傍証となる。

東区の遺構と遺構配置　確認できた建物は，計四棟である。調査区の南端で検出した３間×２間の東西棟ＳＢ22を中心に，その東西にそれぞれ４間×２間の南北棟ＳＢ21・23が並行して存在する。三棟はコ字形の建物配置をとる。ＳＢ21とＳＢ23との間隔は，36尺と完数である。調査区中央のＳＢ24は，１間×１間の建物であるが，柱間は13尺×12尺と柱間は大きい。その西辺・南辺にそって細い溝ＳＤ26がＬ字形に掘られている。溝の中には1.5mないし2mの間隔をおいて小穴がみられる。ＳＢ24は，建物構造を復原しようとするとき，ＳＤ26を周壁溝とする板床をもたない大走り造りの建物を考慮する必要があろう[註1]。これに南接する竪穴遺構ＳＫ19の西側には，南北の柵ＳＡ25がある。

これらの建物・柵の柱穴は，西区と同よう径約40cmであるが，柱根・礎板をとどめるものはない。また，柱穴の切りあい関係はみられない。建物・柵とも完数尺を用いたとみられ，かつ柱間は等尺である（表10）。

ＳＫ18～20は，方形の竪穴遺構である（図版63の2・3）。ＳＫ18に一ヵ所，ＳＫ20に二ヵ所の小穴がみられる。ＳＫ19を含め，竪穴住居址の可能性をもつが断定しえない。ＳＫ19とその周囲から城ヶ崎タイプの能登式製塩土器〔近藤1962〕数個体分が出土している。

東区の建物群は，完数尺を用いており，建物の重複，建て替えが見られない。西区の建物群と同よう，企画性をもって配置され，限られた時期に同時存在していたと推定できる。なお，東区・西区出土土器に時期差はなく，両区の建物群は同一時期の所産といえる。また，西区のＳＢ11～15と東区のＳＢ21・23は，いずれもＮ－12°～15°－Ｅの主軸方位をもっており，一定の企画を有していたことを示す。

中・近世の遺構

ＳＫ17は長径2.8mの楕円形の土壙で，覆土内から第Ⅱ期の珠洲〔吉岡1974〕が出土しており，鎌倉時代後半に属す。北流する大溝ＳＤ27は，東区の西半を占めている。底面から飛鳥時代の土器とともに越中瀬戸が出土しており，近世に至って形成されたものである。建物ＳＢ23の西半は，この溝の氾濫によって浸蝕されている。

ＳＥ28は，河原石を利用した石組みの井戸である（図版63の１）。井戸の底面に長楕円形の大型の石を方形に組み，その上に栗石を四ないし五段積みあげ，上面では円形となっている。時代は確定できないが，近世以降の所産と推定される。

なお，西区の大溝ＳＤ05は，近世に至って再度利用されており，その時に打たれた矢板・杭列が検出された。

Ｃ　出土遺物

ＳＫ17出土の第Ⅱ期の珠洲（擂鉢），ＳＤ05・27出土の越中瀬戸を除き，他は白鳳時代に属する。須恵器は，上述のとおり飛鳥・藤原宮の上器編年のⅣ期に該当する。土師器のうち長甕は，８世紀以降に当地方では一般的な内外面にアテ具・タタキ痕をもつものはない。他に，円面硯・砥石・能登式製塩土器がある。

註１　橋本正氏の御教示による。　　（岸本雅敏）

Ⅳ　ま　と　め

本書掲載の遺跡群が発掘調査されたのは，昭和54年度のことであった。この年度末に刊行された『富山県埋蔵文化財調査一覧』〔山本編1980〕によると，この年，県内において発掘調査された遺跡は71遺跡あり，その発掘総面積は，105,905㎡におよぶ。北陸自動車道路線敷・同土取場にかかるものは，28遺跡（全体の39%強）で，発掘面積は 70,601㎡であった。この面積は，全体の67.6%にあたる。うち，本書にかかわる上市町管内分は，36,000㎡で，全体の34%をしめる。上市町における調査は，空前の規模とテンポをもって実施された。そのことは，富山県埋蔵文化財センターに所属し，現場での稼動可能な文化財保護主事十名のうち，最盛時八名が投入されたことからもうかがえる。現場での作業が本格化した六月下旬から調査終了時まで，稼動日数が延 145日間あった。そのうち，降雨後の排水，調査員のみの作業で費やした日数が54日間あり，この間に雇用した作業員は，延約 350人であった。残りの91日間が土層の掘土と遺構掘に要した日数であり，この間に11,200人あまりの作業員を動員している。一日あたり，平均 123人という数になる。発掘は，人力による手作業に加え，ブルドーザー・ユンボ等の大型機械による表土・盛土の掘土と，ベルトコンベアーの大量使用によって押し進められた。機械類の使用がなければ，調査期間だけでも数倍する日数を必要としたであろう。かくしてこの調査は，昭和54年12月28日午後，制的ともいえる終了日を迎えたのである。

発掘調査終了後，我々調査員の手元に残されたのは，膨大な量の図面と遺物であった。調査報告書が刊行されるまで，決して調査事業が完了したことにはならない。年が明けて，ただちに遺物の整理作業が開始された。幾人かの調査員は，上市町管内いがいの北陸自動車関連遺物や，他に原因して発掘した遺物をも抱えての作業である。しかも，年度内に残された期間は，わずか三ヵ月であり，翌年度四月早々には，新たな発掘現場が待ち構えている。じじつ，三月末に新年度事業の準備が行なわれ，四月第一週には，大部分の文化財保護主事が現場へ散っていった。北陸自動車道関連の遺物整理要員として，一名の織員を残し（主に木器整理担当），他の職員は降雨時を利用して整理作業を継続した。しかし，これも現場作業の本格化とともに休止し，遅々として進まない状況にある。したがって，基礎的な研究すら，手つかずに等しい。三部作として調査報告書が刊行されることになった事由も，そこにあると理解されたい。

以下，現時点で知りえた，遺跡群の性格に関する概要を素述し，今後の整理・研究上の視点と，読者諸氏の理解に供することにしたい。

今回の調査域に，最古の足跡を残した人々は，縄文時代後期後半に生きた人々であった。飯坂遺跡の南東隅最下層に含まれた，わずかな土器がそのことを示す。しかし，遺構は残されていない。人々は，移動の途中，この地に短期日とどまったのであろう。縄文人が通過するさいに残した遺物は，ほかにもある。飯坂遺跡からは，縄文時代晩期初頭の八日市新保式と晩期末の眼目新丸山Ａ式（大洞Ａ式と並行）の土器片が，正印新遺跡からは，晩期後葉の下野式（大洞C_2式と並行）土器が検出されている。両遺跡は近接しており，縄文時代後期後半以後，時おりではあろうが，決して止切れることなく，人の往来があったのである。中期までの縄文人が比較的高地に生活の舞台を持っていたことを思うとき，後期後半以降，低地へ連続して降り立った人々の目的が気にかかる。当時，当地は，湿地に近い景観を持っていたと想像でき，そのことが，前章までに述べてきた，弥生時代以降の遺跡群成立に，もっとも決定的な要件となったのである。

縄文時代は，狩猟・採取によって糧を得ていた時代と考えられている。稲作を主とする農耕社会は，北九州で成立し，弥生時代へと歴史の駒が進む。その萌芽が，少なくとも九州の縄文時代晩期に認められ，夜臼式古段階の土器が

作られたころ（弥生土器中，最古の板付式土器成立直前の縄文土器で，夜臼式の新段階は，板付Ⅰ式と共存する）には，ほぼ完成された水稲耕作が開始されていたという。弥生時代前期の土器は，その発生地の母なる川，遠賀川にちなみ，「遠賀川式土器」と呼ばれている。一種独特の器形と器種構成をもち，古・中・新の三段階ていどに時期区分されている。古段階の遠賀川式土器は，畿内まで，中段階・新段階と新しくなるにしたがって，分布範囲を東へ拡げ，遺跡数を増していく。水稲耕作東漸のようすが，これによってよく跡づけされる。前期のうちに水稲耕作を開始もしくはなんらかの接触をもった地帯は，太平洋側で神奈川県南西部，中部地方で長野県千曲川中流域である。日本海側では，福井県九頭龍川流域が東限とされていたが，類品である壺・高杯が，富山県高岡市石塚遺跡で検出されていた。しかし，遠賀川式土器と確定されぬまま，年数を重ねていた。一方，石川県において遠賀川式土器が縄文時代晩期土器と伴出し，さらに，この報告書記載の正印新・中小泉両遺跡から発見されたのであった。

弥生時代とは，紀元前三世紀から，紀元三世紀にかけての期間をさし，その間は，ほぼ六百年といわれている。前期に二百年，あるいはそれ未満をあてる考えがある。富山・石川両県の遠賀川式土器は，新段階に属するようであり，かの地から，少なくとも百年を経て北陸の地へ招来したことになる。その時点で稲作が開始されたかどうかは不明であるが，その可能性は，残されている。

当地で，確実に稲作が行われたのは，弥生時代中期後半のことである。正印新・中小泉遺跡から，ややまとまった土器が出土しており，そのことを証する。

耕地が拡大し，村としての景観が整うのは，弥生時代後期になってからである。耕地の一角に，三棟ていどを単位とする集落があった正印新遺跡。水利施設をもつ中小泉遺跡。墓域として占地された飯坂遺跡。環濠を巡らす住居を中核に，計七棟の建物を単位とする集落があった江上A遺跡。耕地の一角として水利施設を持ち，二棟以上の建物があったと考えられる江上B遺跡。いずれも，相互に深いかかわりをもって営まれていたことは，うたがいない。特に，江上A遺跡からは，当時の生活を知る上で不可欠な，土器・木製品・農作物が大量に検出された。しかも，ここで石製玉類が量産されていた証拠もつかまれた。また，隣接する江上B遺跡の，中央部南寄りに残された，溝を巡らす四本主柱の建物は特異である。全体の構造は，江上A遺跡の環濠住居と似るが，規模に格段の差を認める。両者が竪穴住居と共通した構造を有し，環濠・溝の内側が屋内であったと仮定すると，江上Aでは差しわたし11m，江上Bでは同じく16.5mていどの床を持つことになる。その面積は，江上Aが約95㎡，江上Bが約214㎡で，その比は1：2.25となる。両住居が，ほぼ同規模の板床建物（2間×1間）を近接してもつことと好対象をなす。ちなみに，国指定の史跡となった縄文時代中期前葉の大住居跡である，朝日町不動堂遺跡第2号住居跡（17m×8mの長円形）の床面積は，120㎡である。江上A・B例とも竪穴住居の見込みが強く，後者は円形竪穴住居としては，最大級に属することになろう。

弥生時代の遺物中いま一つ注目できるものに，東北地方の天王山式系統の土器がある。県下で資料が増加しつつあり，その編年位置を弥生時代中期に満らせる根拠の一つを示した。しかも，本県では，畿内系櫛描文土器と併存する。

飛鳥・鎌倉時代に関する成果もめざましい。遺構・伴出遺物とも，北陸では数少ない一括資料である。公的な性格を強くもつ建物群（東江上—飛鳥，神田—鎌倉）と集落的な性格をもつ江上B遺跡（鎌倉から室町）があり，神田遺跡は，北陸自動車道関連調査で発掘した，立山町若宮B遺跡と，時代・建物群の構造ともに共通する。しかも，珠洲第Ⅰ期頃の同一個体二個分が，それぞれの遺跡から検出され，接合した。両遺跡が，何らかのつながりを有していたことは，うたがいない。今後，それら建物群の性格を追求し，合わせて建物跡の復原作業が必要なのは，いうまでもない。また，広域な地割がなされていたかどうかの検討も必要であり，点在する遺跡間相互に，距離的約束ごとがあるかどうか，今後の精査がまたれる。

（橋本　正）

参考文献

ア　朝倉氏遺跡調査研究所　1976　『一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶ』　福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所編

オ　小野忠熙　1969　「集落と住居」　『新版考古学講座４　原史文化(上)』　雄山閣

カ　狩野　睦・橋本正春　1979　「上市町ＩＧ－06遺跡」　『高速自動車国道北陸自動車道関係埋蔵文化財予備調査概要』　富山県教育委員会

狩野　睦・久々忠義・橋本正春　1981　『北陸自動車道遺跡調査報告－一立山町遺構編――』　富山県教育委員会

キ　岸本雅敏　1980ａ　「江上Ａ（ＩＩＧ06―No.６）遺跡（第Ⅰ期）」　『昭和54年度富山県埋蔵文化財調査一覧』　富山県教育委員会

岸本雅敏　1980ｂ　「江上Ｂ（ＨＧ06―No.７）遺跡（第Ⅰ期）」　『昭和54年度富山県埋蔵文化財調査一覧』　富山県教育委員会

ク　工楽善通　1975　「住居と集落」　『古代史発掘④　稲作の始まり』　講談社

コ　後藤守一編　1962　「韮山村山木遺跡」　(『韮山町史』第一巻所収)

近藤義郎　1962　「能登式製塩土器の研究」　『日本塩業史の研究５』　日本学術振興会

タ　高橋正之・高橋与右衛門　1980　「繁Ⅲ遺跡」　『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』　岩手県埋蔵文化財センター

ナ　奈良国立文化財研究所編　1962　「付章　遺跡遺物の分類標示方法」　『平城宮発掘調査報告Ⅱ』　奈良国立文化財研究所

ニ　西　弘海　1978　「土器の時期区分と型式変化」　『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』　奈良国立文化財研究所

日本考古学協会編　1949　『登呂』

日本考古学協会編　1954　『登呂――本編』

ハ　橋本　正　1974　『高速自動車国道北陸自動車道関係埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書――富山市・朝日町間――』　富山県教育委員会

ヒ　平井　聖　1975　「床の構造よりみた古代の住居」　『日本古代文化の探究　家』　社会思想社

ミ　宮田進一　1980ａ　「神田（ＨＧ05）遺跡（第Ⅰ期）」　『昭和54年度富山県埋蔵文化財調査一覧』　富山県教育委員会

宮田進一　1980ｂ　「東江上（ＨＧ07）遺跡（第Ⅰ期）」　『昭和54年度富山県埋蔵文化財調査一覧』　富山県教育委員会

ヤ　山口県教育委員会編　1980　『下右田遺跡第４次調査概報・総括編』　山口県教育委員会

山本正敏編　1980　『昭和54年度富山県埋蔵文化財調査一覧』　富山県教育委員会

ヨ　吉岡康暢　1976　「加賀・珠洲」　『越前　珠洲』（日本陶磁全集７）　中央公論社

吉岡康暢　1977　「加賀・珠洲」　『世界陶磁全集３　日本中世』　小学館

ワ　和島誠一・田中義昭　1966　「住居と集落」　『日本考古学Ⅲ　弥生時代』　河出書房

表・図版

表1　神田遺跡建物・柵一覧表

遺構名	検出柵の方向	方位	柱間数 桁×梁	規模 m 桁×梁（尺）	柱間 m（尺） 桁行	梁行	備考
SB 001	南北	N−7°−E	2×2	6.3×4.8 (21)(16)	3.0 (11)	2.4 (8)	
SB 002	南北	N−9°−E	2×1	4.8×2.4 (16)(8)	2.4 (8)	2.4 (8)	SA051が西につく。
SB 003	東西	N−11°−E	3×4 以上	7.5以上×9.0 (25以上)(30)	2.7 2.7 2.1 (9) (9) (7)	2.1 2.4 2.4 2.1 (7) (8) (8) (7)	発掘区より西に伸びると思われる。
SB 004	南北	N−10°−E	3×2 以上	7.2×4.8以上 (24)(16以上)	2.4 (8)	2.4 (8)	発掘区西に伸びると思われる。SA052、053が北と東につく。
SB 005	南北	N−4°−E	2×2	4.8×4.8 (16)(16)	2.4 (8)	2.4 (8)	SE081より新。
SB 006	東西	N−4°−E	5×4	12.0×10.5 (40)(35)	2.1 2.4 2.7 2.7 2.1 (7) (8) (9) (9) (7)	2.4 2.7 2.7 2.7 (8) (9) (9) (9)	SB008、009より新、SB007、010不明、SK102、SD126、SX112より新。
SB 007	南北	N−4°−E	3×2	8.4×4.8 (28)(16)	3.0 2.7 2.7 (10) (9) (9)	2.4 (8)	SB009、010不明 SD122より新
SB 008	南北	N−4°−E	2×2	6.0×4.8 (20)(16)	3.0 (10)	2.4 (8)	SB009、SD125、126、SX112より新、SB010不明
SB 009	東西	N−3°−E	3×2	7.2×5.4 (24)(18)	2.4 (8)	2.7 (9)	SD122より新、SB010不明
SB 010	南北	N−3°−E	4×4	12.0×9.6 (40)(32)	3.0 (10)	2.4 (8)	SB011、012、SX112、113より新、SB013、SX114不明
SB 011	南北	N−7°−E	4×4	10.2×9.9 (34)(33)	2.4 2.7 2.7 2.4 (8) (9) (9) (8)	2.4 2.7 2.7 2.1 (8) (9) (9) (7)	SB012、013、SX113、114より新
SB 012	東西	N−4°−E	4×3	9.6×7.5 (32)(25)	2.1 2.7 2.7 2.1 (7) (9) (9) (7)	2.4 2.4 2.7 (8) (8) (9)	SX113より旧 SB013、SX114不明
SB 013	南北	N−2°−E	4×4	11.1×9.9 (37)(33)	2.1 3.0 3.0 3.0 (7) (10) (10) (10)	2.4 2.7 2.4 2.4 (8) (9) (8) (8)	SD123より旧 SB014、015、SX114不明
SB 014	南北	N 4°−E	2×2	4.8×4.8 (16)(16)	2.4 (8)	2.4 (8)	
SB 015	東西	N−4°−E	2×2	5.4×4.8 (18)(16)	2.7 (9)	2.4 (8)	SB014より新
SB 016	南北	N−6°−E	4×4	10.8×9.6 (36)(32)	2.4 2.7 2.7 3.0 (8) (9) (9) (10)	2.1 2.7 2.7 2.1 (7) (9) (9) (7)	
SB 017	南北	N 5°−E	3×1	6.9×2.1 (23)(7)	2.1 3.0 1.8 (7) (10) (6)	2.1 (7)	
SB 018	南北	N−2°−E	4×1	8.1×2.4 (27)(8)	2.7 3.0 1.2 1.2 (9) (10) (4) (4)	2.4 (8)	SK104より新
SB 019	南北	N−2°−E	5×4	13.2×9.9 (44)(33)	2.4 3.0 2.7 2.1 (8) (10) (9) (7)	2.4 2.7 2.7 2.1 (8) (9) (9) (7)	
SB 020	南北	N−3°−E	4×4	10.8×9.8 (36)(32)	2.7 3.0 2.7 2.4 (9) (10) (9) (8)	2.1 2.7 2.7 2.1 (7) (9) (9) (7)	
SA 051	南北	N 9°−E	2	4.8 (16)	2.4 (8)		
SA 052	東西	N−80°−W	1以上	2.4以上 (8以上)	2.4 (8)		発掘区西に伸びると思われる。
SA 053	南北	N−12°−E	3	6.3 (21)	2.1 (7)		SX112より新
SA 054	南北	N−1°−E	6	15.3 (51)	2.4 2.7 2.7 2.7 2.7 2.1 (8) (9) (9) (9) (9) (7)		
SA 055	東西	N−87°−W	6	14.7 (49)	2.7 2.1 2.4 2.1 2.7 2.7 (9) (7) (8) (7) (9) (9)		
SA 056	南北	N−6°−E	3	6.9 (23)	2.1 2.1 2.7 (7) (7) (9)		
SA 057	南北	N−6°−E	5	13.2 (44)	2.4 2.7 2.7 2.7 2.7 (8) (9) (9) (9) (9)		SD121より新
SA 058	南北	N−3°−E	3	7.2 (24)	2.4 2.1 2.7 (8) (7) (9)		
SA 059	東西	N−85°−W	5	12.3 (41)	2.7 2.7 2.7 2.1 2.1 (9) (9) (9) (7) (7)		
SA 060	東西	N−88°−W	4	10.5 (3.5)	2.4 2.4 3.0 2.7 (8) (8) (10) (9)		
SA 061	東西	N−84°−W	2	4.8 (16)	2.1 2.7 (7) (9)		
SA 062	南北	N−88°−W	1	2.4 (8)	2.4 (8)		SA063に直交
SA 063	東西	N 3°−E	1	4.8 (16)	4.8 (16)		SK105より新
SA 064	南北	N−0°−E	3	5.4 (18)	2.1 1.8 1.5 (7) (6) (5)		
SA 065	南北	N−3°−E	3	11.1 (37)	6.0 2.7 2.4 (20) (9) (8)		

（柱間の数値は、東西棟では北西隅、南北棟では北東隅、東西柵は西より、南北柵は北よりの計測値を示した。方位は、南北、東西両棟に関係なく、北に対してふれる角度を示した。）

表 2　正印新遺跡建物一覧表

遺構名	棟持柱の有無	方位	柱間数 桁×梁	規模 m 桁×梁
SB21	南北	N−15°−W	1×2	4.2×3.2(1.6×1.6)
SB22	東西	N−14°−E	1×1	3.2×3.0
SB23	南北	N−29°−E	2×2	6.8(3.8×3.3)×6.2(3.0×3.2) 6.7(3.2×3.5)×6.3(3.0×3.2)
SB24	南北	N−33°−W	1×1	2.4×2.0
SB25	南北	N−20°−W	1×1	3.0×2.7

柱根の形状・有無 断面形	残存数	残存長	時代	備考
丸柱	3本	70cm	弥生	柱根は掘り方より深く沈む。
丸柱	4本	80cm	弥生	柱根は掘り方より深く沈む。
丸柱	4本	10～30cm	中世	SD01に切られる。
丸柱	2本	40・20cm	弥生中期	柱根は掘り方より深く沈む。
丸柱	2本	40・20cm	弥生中期	SB24はより新 柱根は掘り方より深く沈む。

(注)記載要領は、表1に従っている。

表 3　正印新遺跡溝一覧表

溝	流路	時代	出土遺物	備考
SD01	北→南	江戸	越中瀬戸 ゲテ焼土器	最も新しい遺構
SD02	東→西	中世	土師質土器 須恵器	SK34・32より新
SD03	〃	弥生	土師器 弥生土器	SD03よりSD04が新
SD04	〃	〃?	〃	
SD05	〃	〃?	〃	SD06より新
SD06	〃	〃?	〃	
SD07	南→北	〃	〃	SD09より新
SD08	南→北	〃	〃	〃
SD09	東→西	〃	〃	SD07・08より古
SD10	東→西	弥生		SD07・09より古。SD16より古。SD18が流れ込む。
SD11	南東→北	〃	弥生土器 クイ・板	SD18より新しくSD16に流れ込む。SK26より古。
SD12		〃?		弥生時代のものか? 幅50cmで隅丸方形
SD13	東→西	〃	弥生土器	SK26より古
SD14	東→西	〃	弥生土器	
SD15	南→北?	〃?	弥生土器	SD14より古
SD16	南東→北西	〃	弥生土器	SD18より新。SD11と合流 SD20より古
SD17	東→西?	〃?		
SD18	南→北	〃	弥生土器	SD11、16より古 SD10に合流か?
SD19	南東→北西	〃		
SD20	東→西	〃	弥生土器	直角におれながら東西に流れる。SD16より新

表 4　正印新遺跡穴他一覧表

穴など	平面形	規模 m	壁高 cm	出土遺物	時代	備考
SK26	隅円方形	3.0×2.0以上	40	越中瀬戸 近世陶器、染器片	江戸	SD01と同一時期
SK27	楕円形	1.7×1.7	20			
SK28	円形	1.0×1.0	30			
SK29	〃	0.7×0.85	25	土師質土器 木器、炭化米	中世	
SK30	楕円形	1.0×1.4	30			
SK31	隅円長方形	1.8×0.8	10	弥生土器	弥生中期	
SK32	円形	1.0×1.0	20	〃	弥生中期	
SK33		1.0×1.3	10			
SK34	不定形	5.0×約2.0	15	弥生土器	弥生中期	
SE35	円形	1.0×1.0	40	伊万里	江戸	SD12を切る。SD01、SK26と同時期
SX36	楕円形	0.5×0.3	5			焼土のみが検出された。

表 5　江上A遺跡建物・棟一覧表

建物(棟)	棟方向	方位(計)	柱間 桁×梁	規模 m	柱根の形状 cm 断面形	直径(辺)	残存長	備考
SB14	東西	N−85°−W	1×1	2.8×2.55	丸柱	30	20～45	礎板
SB15	東西	N−85°−W	1×1	2.45×2.35	なし			
SB16	南北	N 1°−E	2×2	4.85×4.35	角柱・丸柱	15	40～50	柱根にえぐり北西隅柱なし
SB17	東西	N−82°−E	2×1	3.7×3.1	角柱	16	80～90	
SB18	南北	N−5°−E	1×1	3.4×2.8	丸柱	20	50～60	北西隅柱なし
SB19	南北	N−11°−E	1×1	3.4×2.75	角柱	12	35～50	
SB20	南北	N−22°−E	1×2	3.6×2.4	角柱	16	60～80	北東隅柱なし
SA21	東西	N−89°−W	1	4.3	丸柱	16	26	西柱なし
SA22	東西	N−83°−W	2	4.85 (2.2+2.65)	角柱	10	20	西端柱のみ柱根、水片が3～6片はいる。
SA23	東西	N−84°−E	2	6.25 3.05+3.2	なし			棒状の木片はいる。
SA24	東西	N−87°−E	1	3.25	角柱	12×16	30	

(註)建物の長軸(桁行)に対する角度で磁北との関を読む。以下同じ。

表 6　江上A遺跡環状溝一覧表

環状溝	平面形	溝の形状 cm 幅	壁高	底面	内区の形状 規模(m)	長軸方位	出土遺物	備考
SD03	馬蹄形	2～3m	30～40	平坦	10.7×12	N−85°−W	木器、玉髄、砥石、ひょうたん、白色粘土	
SD04	8の字形	40	6	平坦	4.2×4.8	N−74°−W	木器、炭化米、磨石	SD02接続
SD05	五角形	30～50	10～40		8.3×9.2	N−42°−E	木器	
SD06	方形	30	20		2.4×2.5	N 85°−W		
SD07	方形?	50	30		1.5×1.8	N−80°−W		

表7　江上Ａ遺跡溝一覧表

溝	流路	溝の形状 cm 幅	壁高	底面	出土遺物	備考
ＳＤ01	南→北	300～400	50	平坦	木器，玉類，砥石，骨片 炭化米，ひょうたん	
ＳＤ02	西→東	60～150	40		木器，玉類，砥石，骨片	ＳＤ01へ合流
ＳＤ08	北→南	30	5	平坦		ＳＤ02へ合流
ＳＤ09	北↔南	50	5	平坦		
ＳＤ10	東→西	40	10		木器	ＳＤ01へ合流
ＳＤ11	西→東	50～100				ＳＤ02へ合流
ＳＤ12	東→西	50	10～30			ＳＤ01を切る
ＳＤ13	北→南	40	8	平坦	木器	

表8　江上Ａ遺跡　その他遺構一覧表

その他の遺構	平面形	大きさ cm	壁高 cm	出土遺物，備考
ＳＫ27	方形	150×180	25	
ＳＫ28	楕円形	100×150	20	木器
ＳＫ29	円形	50×50	25	木器
ＳＫ30	円形	50×50	20	ヒスイ剥片
ＳＫ31	円形	40×50	35	木器
ＳＫ32	楕円形	50×80		丸柱（辺10cm）
ＳＫ33	円形	20×20	7	
ＳＫ34	楕円形	20×40		角柱（辺９cm）
ＳＫ35	円形	40×40	20	
ＳＫ36	円形	40×40	40	角柱（辺９cm）
ＳＫ37	円形	20×20	12	
ＳＫ38	円形	40×40		
ＳＫ39	円形	30×30		白色粘土
ＳＫ40	円形	100×110	23	
ＳＫ41	杭（辺５cm）		25	木器
ＳＫ42	角柱（辺10cm）		30	
ＳＫ43	円形	40×40		角柱（辺９cm）
ＳＫ44	円形	30×30		
ＳＫ45			10	木器
ＳＫ46	杭			
ＳＫ47	杭			

表9　江上Ｂ遺跡建物・柵一覧表

遺構名	棟・柵の方向	方位	柱間数 桁×梁	規模 m 桁×梁（尺）	柱間 m（尺） 桁行	梁行	備考
ＳＢ111	南北	Ｎ−18°−Ｅ	1×1	4.5×4.4	4.5	4　4.4 （北側）（南側）	弥生，ＳＤ020が巡る。
ＳＢ112	東西	Ｎ−5°−Ｅ	5×2	10.8×4.8 (36)　(16)	2.1　2.4　2.1　2.1　2.1 (7)　(8)　(7)　(7)　(7)	2.4 (8)	中世，北側，南側に塀がつくのか，建物は東へ延びる。梁行は推定
ＳＢ113	東西	Ｎ−4°−Ｅ	4×2	8.1×4.5 (27)　(15)	2.1　2.1　1.8　2.1 (7)　(7)　(6)　(7)	2.4　2.1 (8)　(7)	中世，建物は東へ延びる。
ＳＢ114	東西	Ｎ−11°−Ｅ	3×2	7.2×4.8 (24)　(16)	2.4 (8)	2.4 (8)	中世，総柱
ＳＢ115	東西？	Ｎ−9°−Ｅ	2×2	4.8×4.8 (16)　(16)	2.4 (8)	2.4 (8)	中世，総柱
ＳＢ116	東西	Ｎ−6°−Ｅ	3×2	7.5×5.1 (25)　(17)	2.4　2.4　2.7 (8)　(8)　(9)	2.7　2.4 (9)　(8)	中世，総柱
ＳＢ117	南北	Ｎ−7°−Ｅ	4×2	11.7×4.8 (39)　(16)	2.4　3.1　3.1　3.1 (8)　(10.3)　(10.3)　(10.3)	2.4 (8)	中世，総柱
ＳＢ118	南北？	Ｎ−5°−Ｅ	3×3	7.5×7.2 (25)　(24)	2.7　2.4　2.4 (9)　(8)　(8)	2.4 (8)	中世，総柱，北側にＳＡ131，南側にＳＡ132が付く廂，塀になるのか。
ＳＢ119	南北	Ｎ−2°−Ｅ	2×2	5.7×4.8 (19)　(16)	3　2.7 (10)　(9)	2.4 (8)	中世，総柱
ＳＢ120	東西	Ｎ−10°−Ｅ	5×4	11.7×9.3 (39)　(31)	2.4　2.4　2.4　2.1 (8)　(8)　(8)　(7)	2.4　2.1　2.4　2.4 (8)　(7)　(8)　(8)	中世，総柱，東側にＳＡ133，西側にＳＡ134が付く塀，廂になるのか。
ＳＢ121	東西	Ｎ−10°−Ｅ	4×4	9.2×8.1 (30.7)　(27)	2.3 (7.7)	1.8　2.1　2.1　2.1 (6)　(7)　(7)　(7)	中世，総柱
ＳＢ122	東西？	Ｎ−9°−Ｅ	4×4	9.6×9.3 (32)　(31)	2.4 (8)	2.4　2.4　2.7　1.8 (8)　(8)　(9)　(6)	中世，総柱 ＳＡ135が付き，塀になるのか。
ＳＢ123	南北	Ｎ−2°−Ｅ	2×2	4.5×3.9 (15)　(13)	2.4　2.1 (8)　(7)	2.7　1.8 (7)　(6)	中世
ＳＢ124	南北	Ｎ−2°−Ｅ	3×2	7.8×4.5 (26)　(15)	2.4　2.1 (8)　(7)	2.4　2.4　3.0 (8)　(8)　(10)	中世，総柱
ＳＢ125	東西	Ｎ−19°−Ｅ	2×1	3.9×3.6 (13)　(12)	1.9　2.0 (6.3)(6.7)	3.6 (12)	弥生（？）
ＳＢ126	南北	Ｎ−10°−Ｅ	2×1	5.7×2.4 (19)　(8)	3　2.7 (10)　(9)	2.4 (8)	中世（？）
ＳＢ127	東西	Ｎ−32°−Ｗ	2×1	6×3.2 (20)　(10.7)	3.1　2.9 (10.7)(7.7)	3.2 (10.7)	時代不明
ＳＡ131	東西	Ｎ−87°−Ｗ	3	7.8 (25)	2.7　2.7　2.4 (9)　(9)　(8)		ＳＢ118に付く
ＳＡ132	南北	Ｎ−6°−Ｅ	3	7.2 (24)	2.7　2.4　2.1 (9)　(8)　(7)		〃
ＳＡ133	南北	Ｎ−10°−Ｅ	4	9 (30)	2.3　2.3　2.2　2.2 (7.7)(7.7)(7.3)(7.3)		ＳＢ120に付く
ＳＡ134	東西	Ｎ−80°−Ｗ	2	4.6 (16)	2.4 (8)		ＳＢ120に付く 東へ延びる
ＳＡ135	南北	Ｎ−9°−Ｅ	3	6.9 (23)	2.1　2.4　2.4 (7)　(8)　(8)		ＳＢ122に付く 南へ延びるのか

（註）記載要領は，表１に従っている。

表10　東江上遺跡建物・柵一覧表

建　物	棟・柵の方向	方　位	柱間数 桁×梁	規　模 桁×梁(尺)	柱間 m(尺) 桁行	柱間 m(尺) 梁行	備　考
SB11	東西？	N－13°－E	2 × 2	3.0 × 3.0 (10) (10)	1.5 (5)	1.5 (5)	SB12・13と並行 SB12との間隔は6尺
SB12	東　西	N－15°－E	3 × 2	4.5 × 3.6 (15) (12)	1.5 (5)	1.8 (6)	SB11・13と並行，越枝 SB13との間隔は5尺
SB13	東西？	N－13°－E	2 × 2	3.6 × 3.6 (12) (12)	1.8か (6)	1.8 (6)	SB11・12と並行
SB14	南　北	N－47°－E	3 × 2	7.2 × 4.8 (24) (16)	2.4 (8)	2.4 (8)	
SA15	南　北	N－16°－E	2	10.8 (36)	5.7 5.1 (19) (17)		
SA16	東　西	N－69°－W	2	4.2 (14)	2.1 (7)		
SB21	南　北	N－13°－E	4 × 2	7.2 × 5.4 (24) (18)	1.8 (6)	2.7 (9)	SB23との間隔は36尺
SB22	東　西	N－22°－E	3 × 2	5.4 × 4.2 (18) (14)	1.8 (6)	2.1 (7)	
SB23	南　北	N－12°－E	4 × 2	8.4 × 5.1 (28) (17)	2.1 (7)	2.7 (9)	西半はSD27に掘りきれている。
SB24	東西？	N－22°－E	1 × 1	3.9 × 3.6 (13) (12)	3.9 (13)	3.6 (12)	SD26がL字形に囲む。
SA25	南　北	N－19°－E	4	7.2 (24)	1.8 (6)		

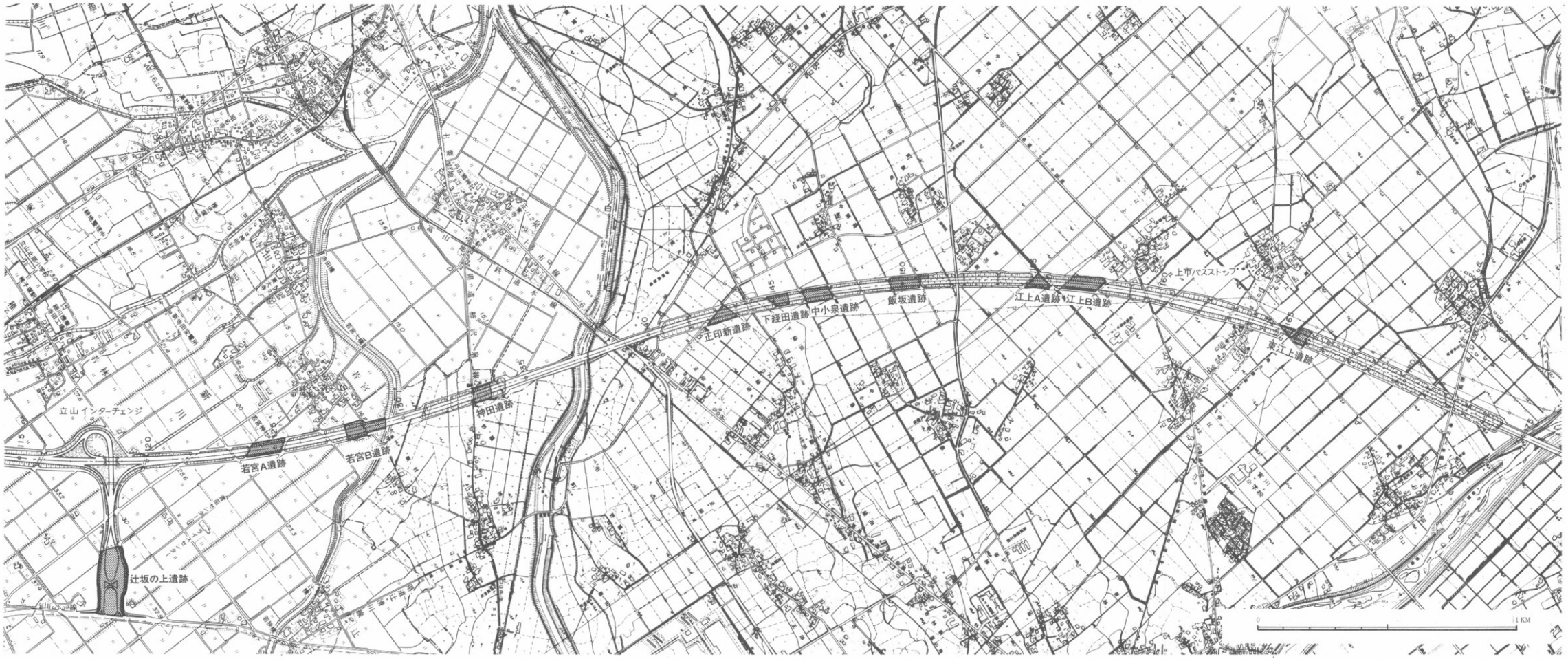
（註）記載要領は，表1に従っている。

表11　東江上遺跡溝一覧表

溝	流　路	規模(cm) 幅	深さ	底	出土遺物	備　考
SD01	北東 → 南西	40～70	15		土師器	SD05に合流。直線状，全長3.5m
SD02	北東 → 南西	40	15			直線状，全長1.6m
SD03	北東 → 南西	30～50	15		土師器	SD05に合流。直線状，全長11m
SD04	北西 → 南東	30～120	30～40		須恵器	SK10に合流か。2本に分岐，合流
SD05	北 → 南	6m以上	120	平　坦	須恵器大甕一個体分，土師器，越中瀬戸	近世の溝が重複
SD06	北 → 南	15	10			2本の柱穴を結ぶ。直線，全長3.9m
SD07	北西←→南西	30	10			SB12が切っている。直線，全長3.6m＋α？
SD26	南 → 北 東 → 西	30～40	15			L字状，溝内に柱穴をもつ。SB24を囲む。
SD27	南　北	17m	70	平　坦	須恵器，土師器，製塩土器，越中瀬戸	江戸時代

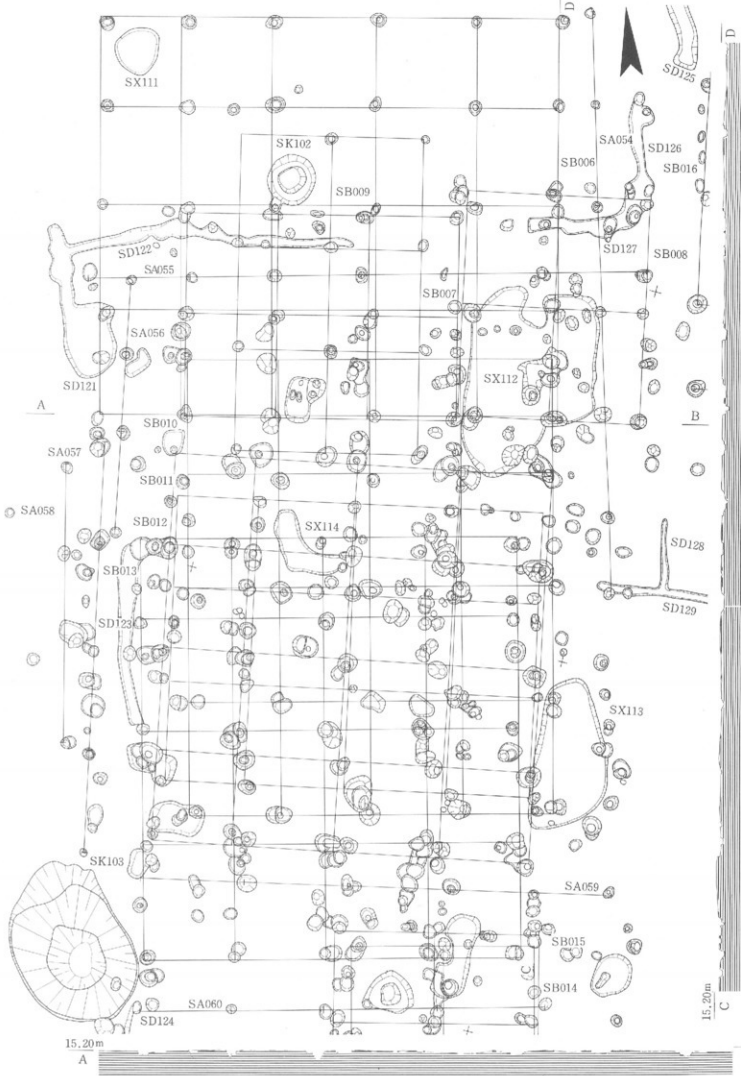
表12　東江上遺跡竪穴遺構ほか一覧表

遺　構	平面形	規　模(m)	深さ(cm)	出土遺物	備　考
SX08	楕　円　形	1.0 × 0.5	6		焼土
SX09	楕　円　形	0.9 × 0.6	10		焼土
SK10	不整三角形？	4.2 × 4.0	17	須恵器	未調査区につづく。
SK17	楕　円　形	2.8 × 2.3	50	珠洲(Ⅱ期)すり鉢	中世
SK18	長　方　形	3.0 × 6.0	10	須恵器	竪穴遺構 床にピット1
SK19	隅丸方形	6.0 × 6.0	15	須恵器	竪穴遺構
SK20	不整長方形	6.3 × 5.7	15	須恵器，能登式製塩土器	竪穴遺構 床に溝1本，2本の柱穴を結ぶ
SE28	楕　円　形	0.9 × 0.8	50	土師質土器片1	馬蹄石組み，近世？

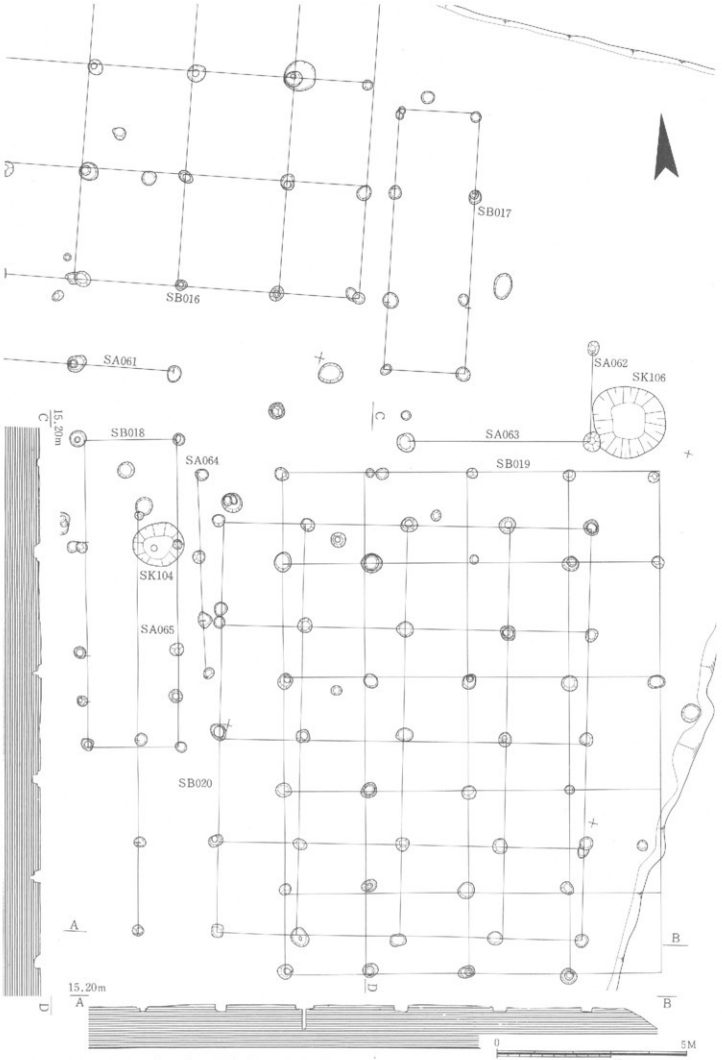


図版Ⅰ　遺跡と周辺の地形（S＝1／10,000）（註）薄いスクリーントーンは昭和54年度試掘調査範囲を示す

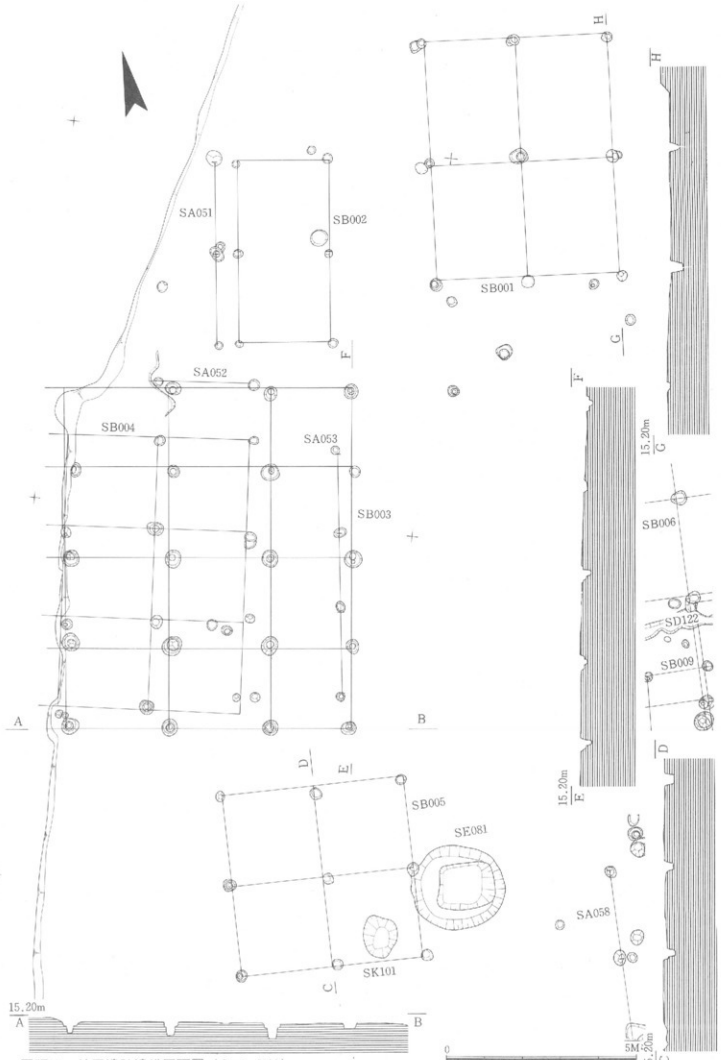
図版２　神田遺跡遺構配置図（Ｓ＝1／250）



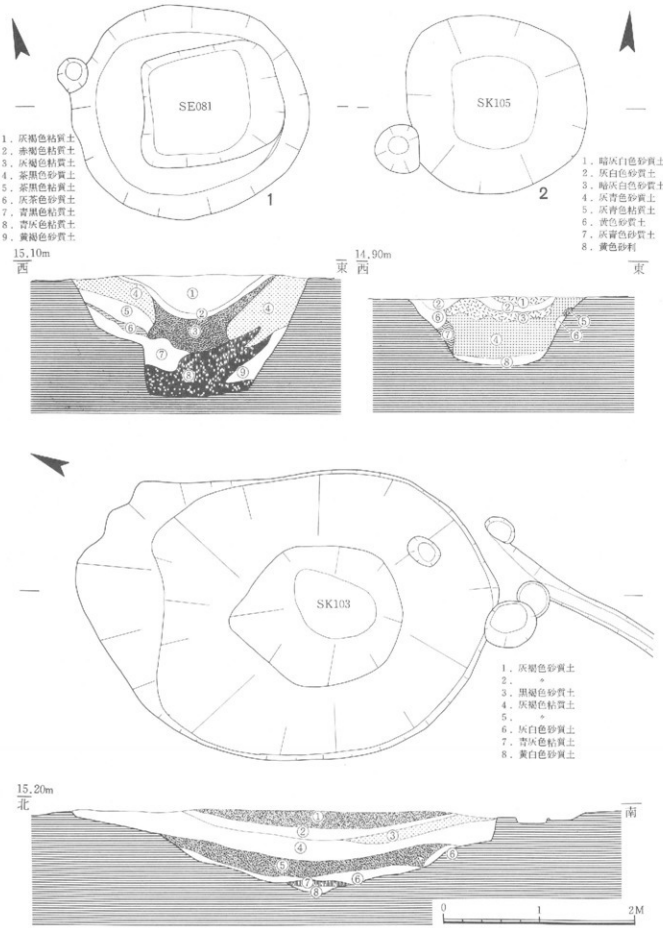
図版 3　神田遺跡遺構平面図（S＝1／100）



図版 4　神田遺跡遺構平面図（S＝1／100）



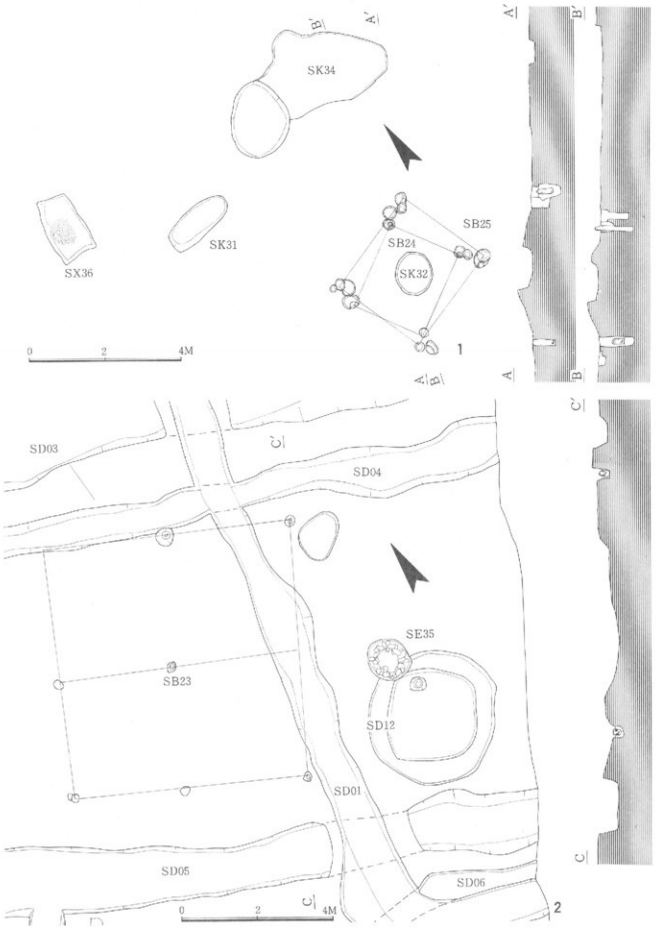
図版5　神田遺跡遺構平面図（S＝1／100）



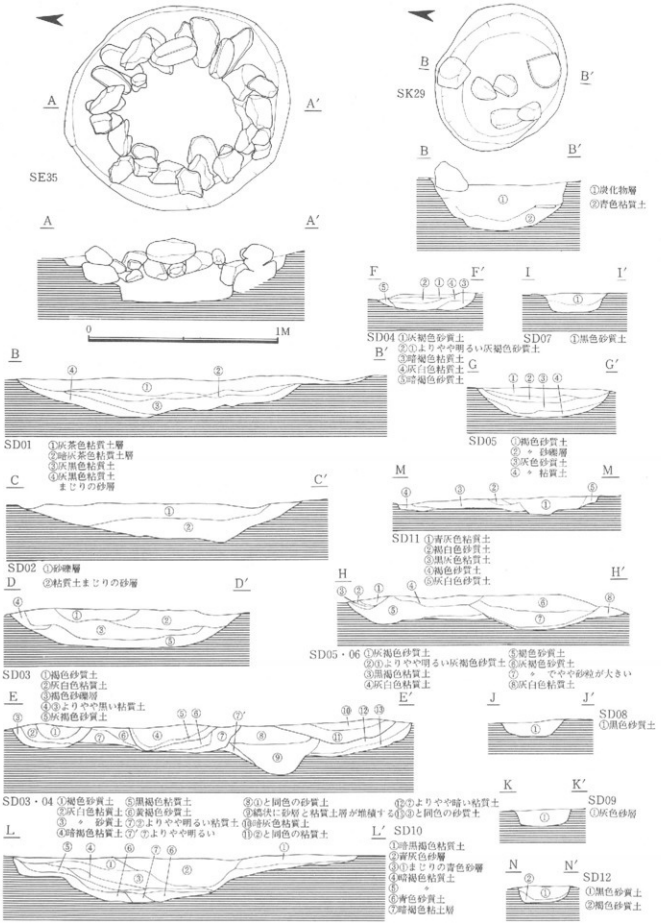
図版 6　神田遺跡遺構平面図（S＝1／40）

図版7　正印新遺跡（S＝1／250）1.弥生時代の遺構

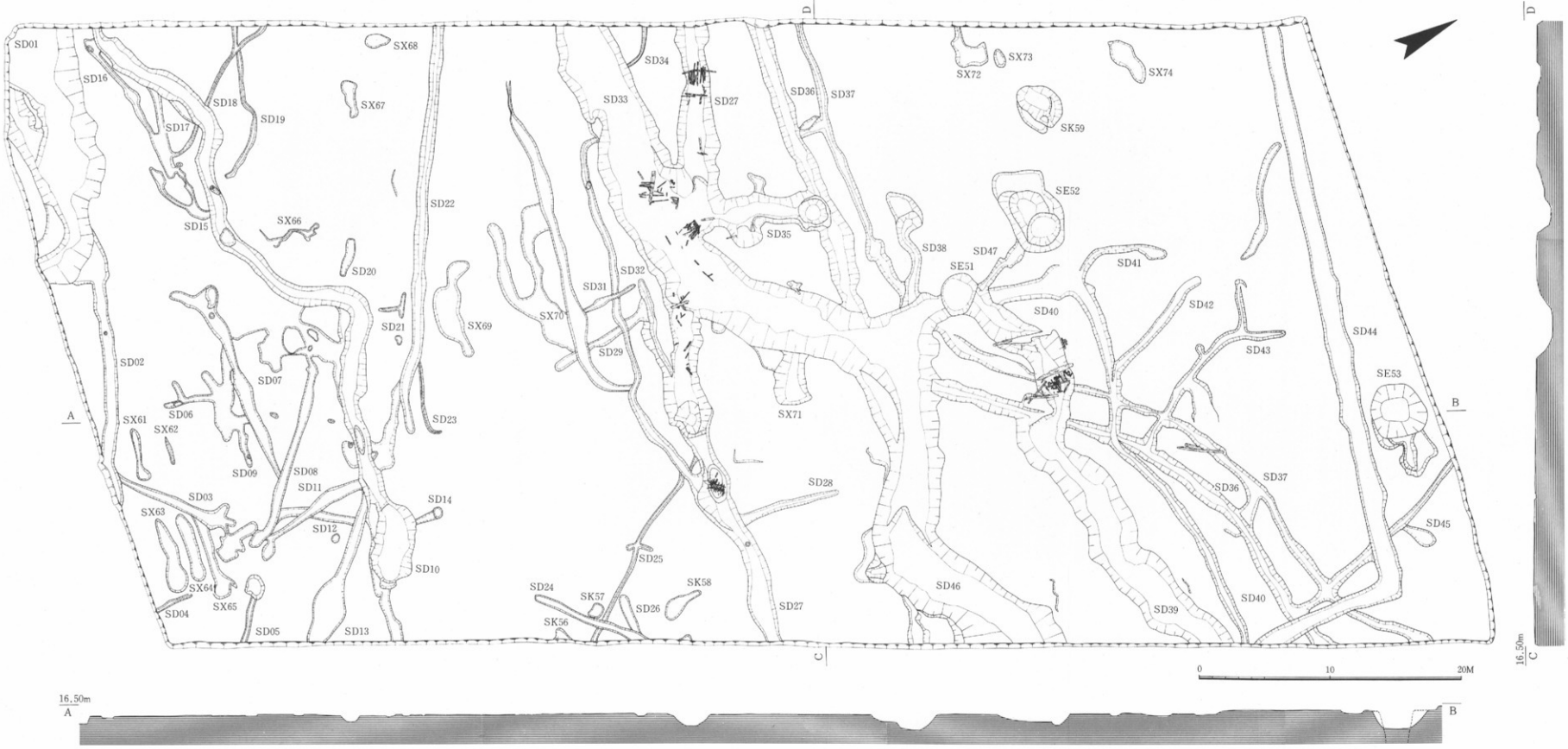
図版 8　正印新遺跡遺構配置図（S＝1／250）2.中・近世及びその他の時代の遺構



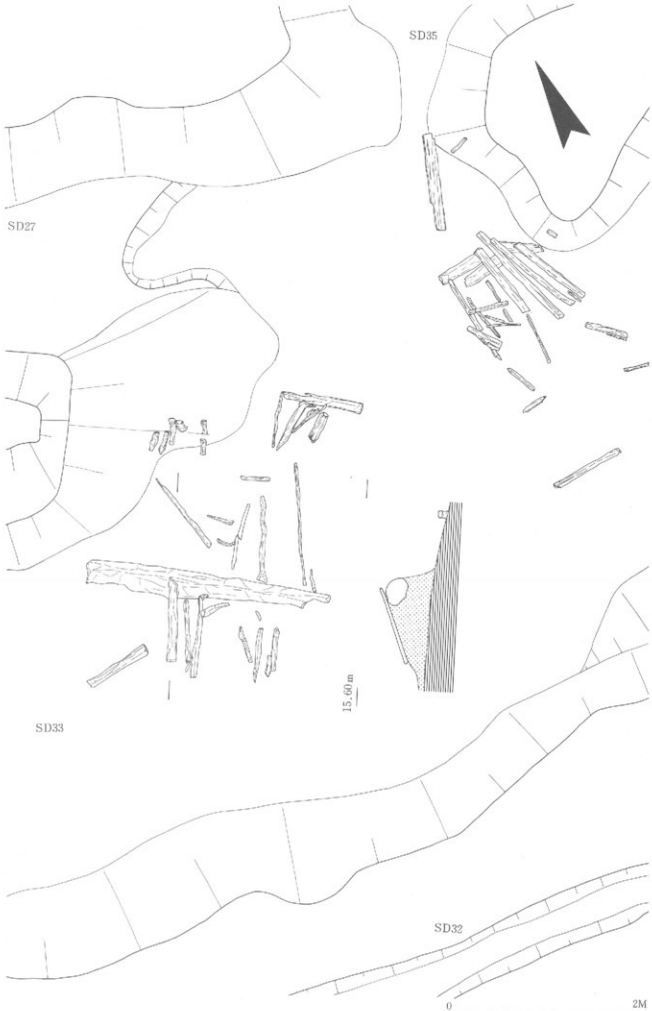
図版 9　正印新遺跡遺構平面図（S＝1／100）　1.SB24・25・　SK31・32・34　SX36
2.SB23　SE35・　SD12



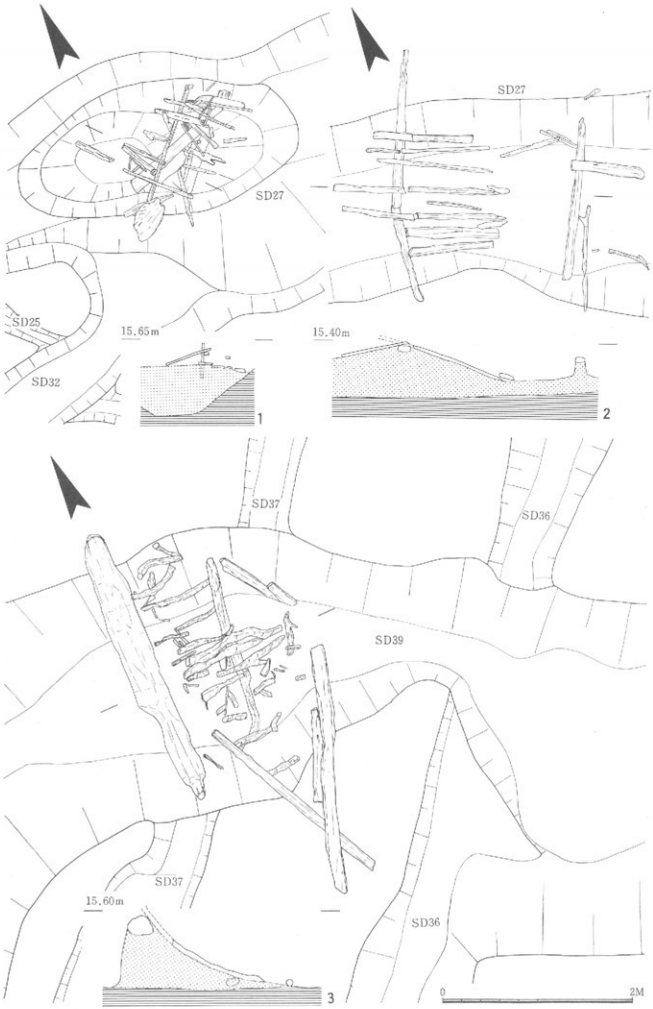
図版10　正印新遺跡　遺構平面図・土層断面図（S＝1／40）SE35，SK29（S＝1／20）



図版11　中小泉遺跡遺構配置図（S＝1／250）

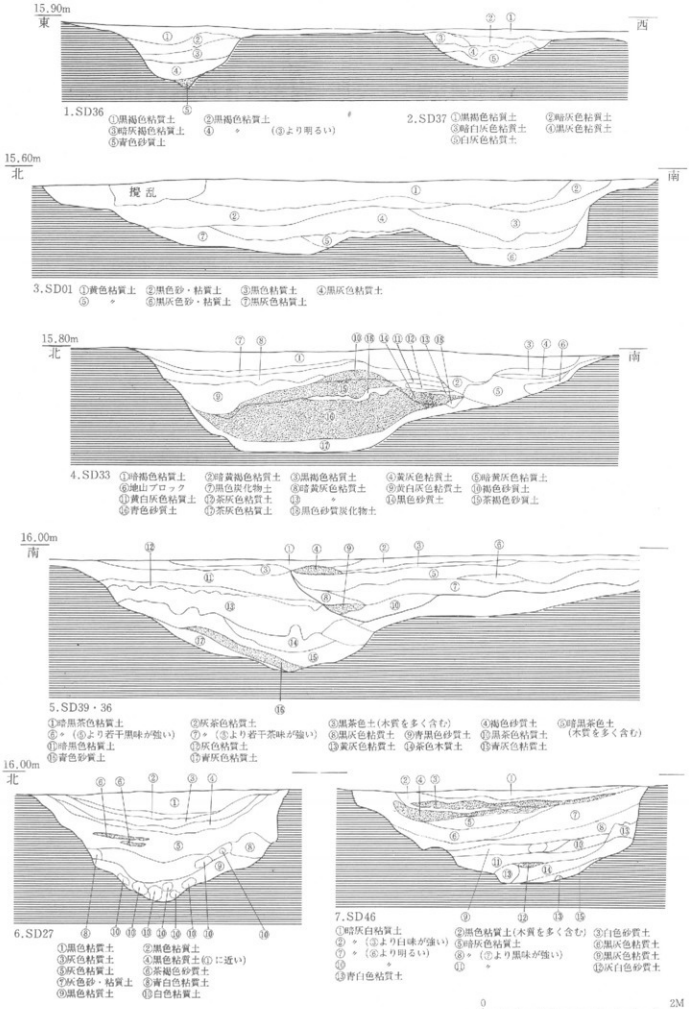


図版12　中小泉遺跡遺構平面図（S＝1／40）

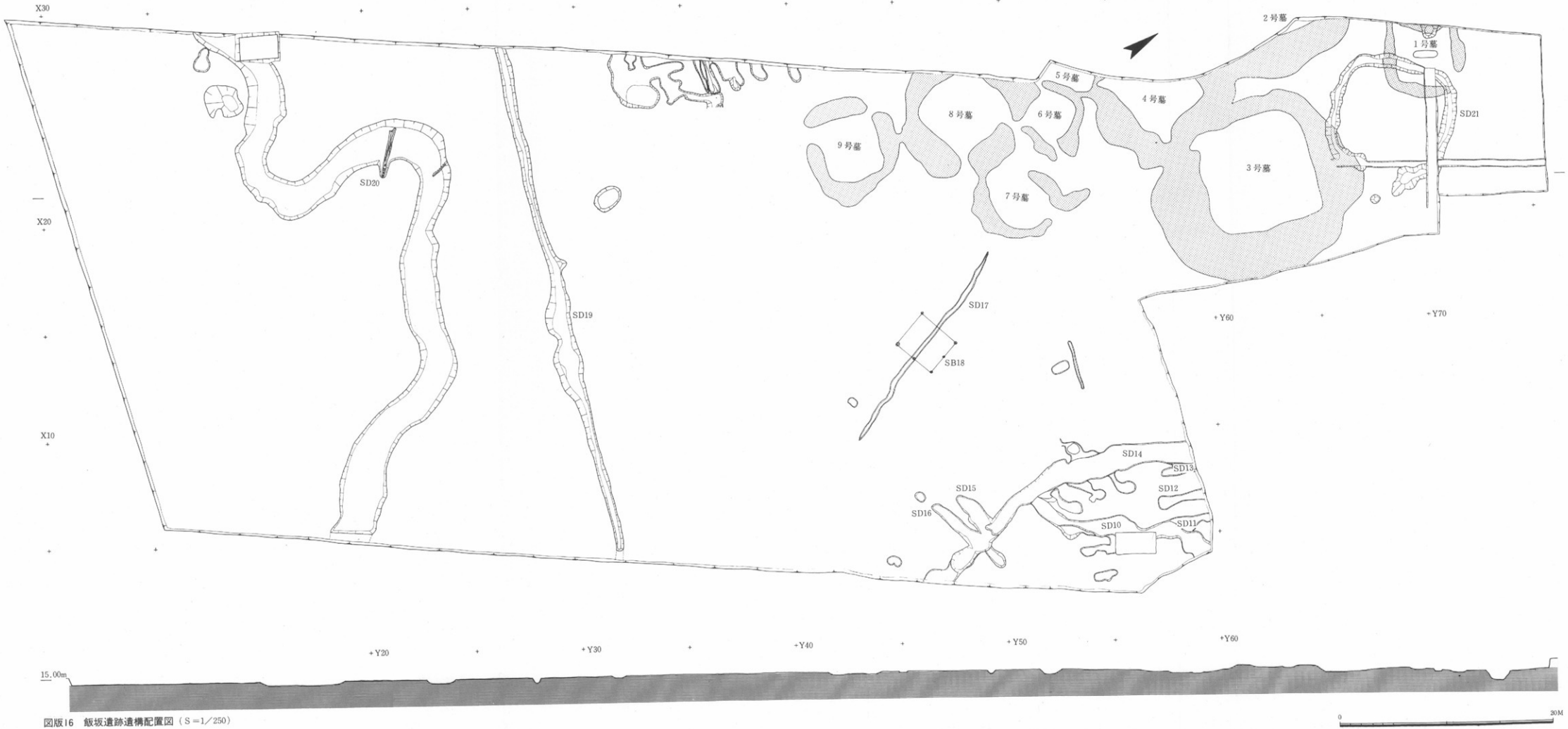


図版13　中小泉遺跡遺構平面図（S＝1／40）1.SD27　2.SD27　3.SD39

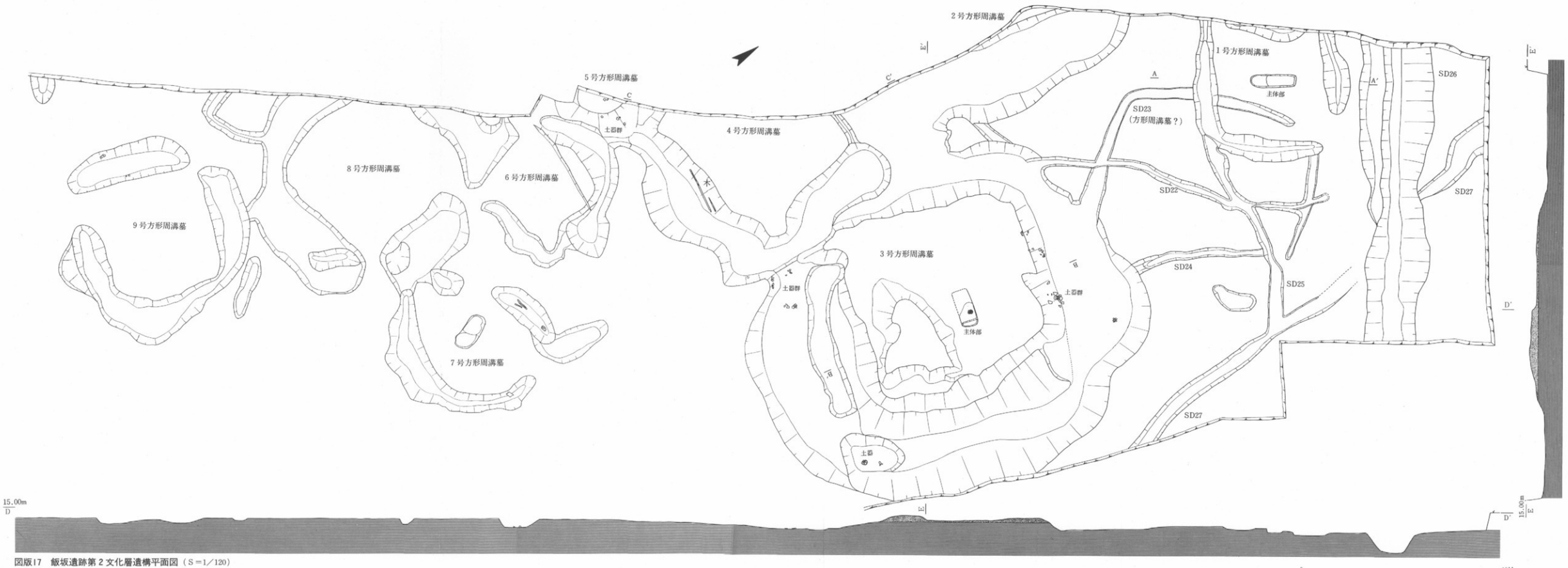
図版14　中小泉遺跡遺構時代別分布図（S＝1／500）



図版15　中小泉遺跡溝土層断面図（S＝1／40）1.SD36　2.SD37　3.SD01　4.SD33
5.SD39・36　6.SD27　7.SD46

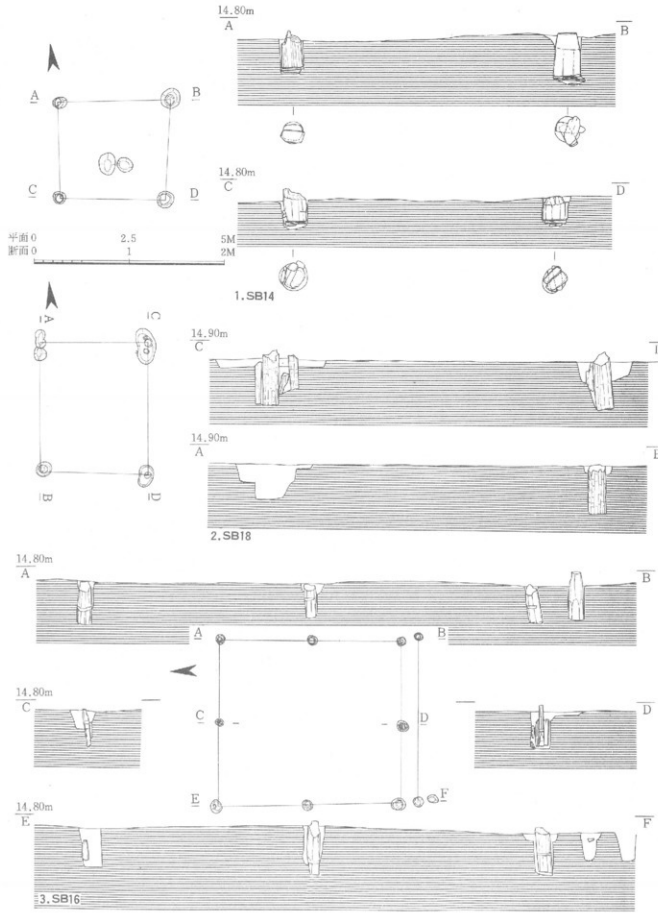


図版16　飯坂遺跡遺構配置図（S＝1／250）

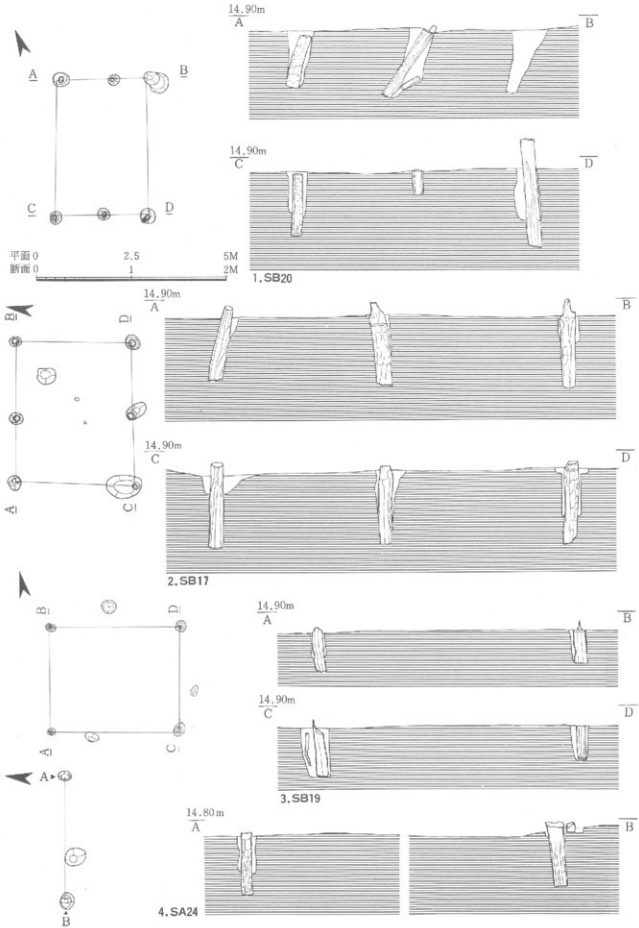


図版17　飯坂遺跡第２文化層遺構平面図（S＝1／120）

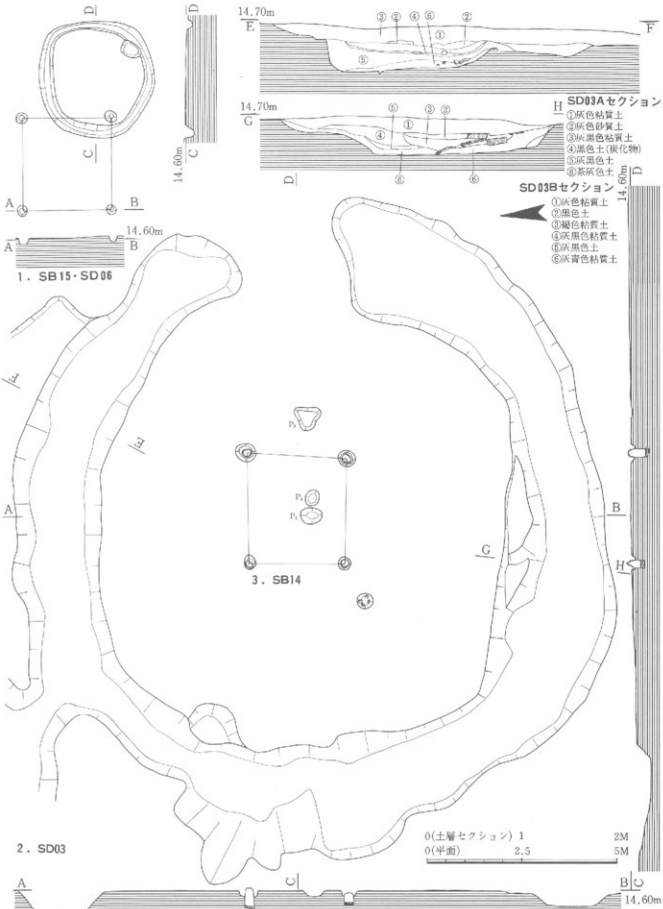
図版18　江上A遺跡遺構配置図（S＝1／240）



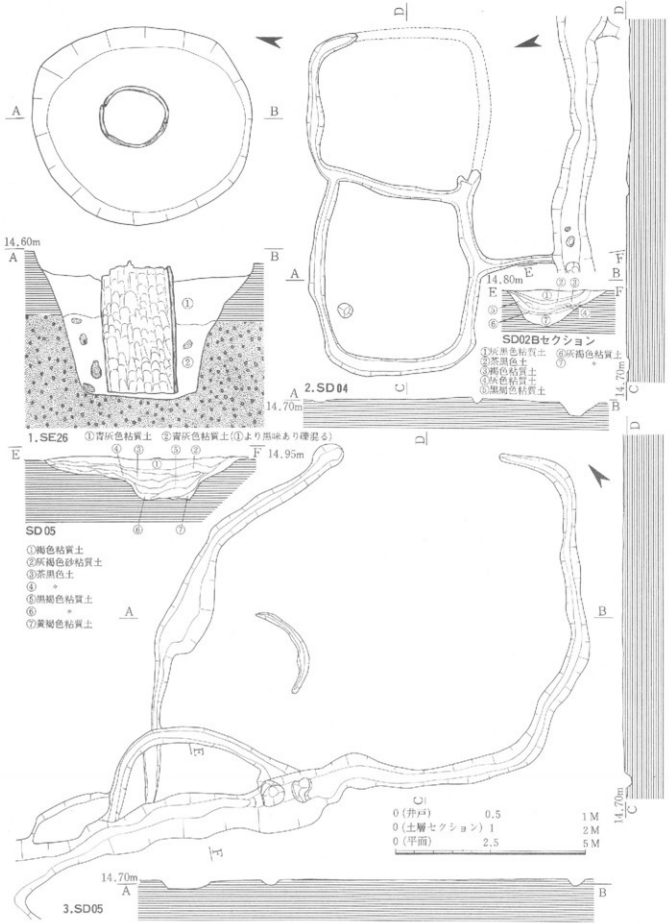
図版19　江上A遺跡建物柱穴断面図（平面図1／100 断面図1／40）1．SB14　2．SB18　3．SB16



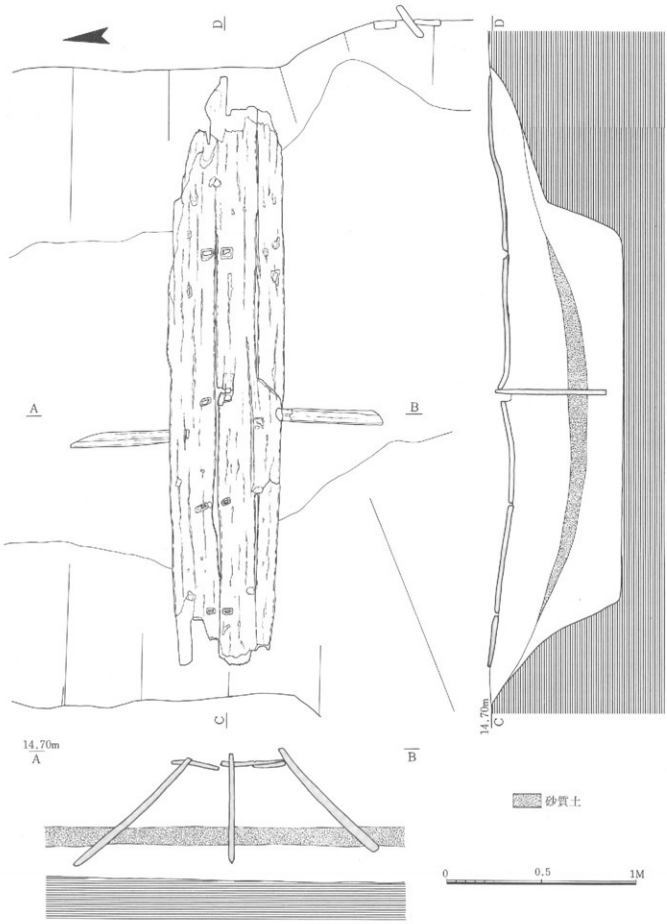
図版20　江上A遺跡建物柱穴断面図（平面図1／100 断面図1／40）1.SB20　2.SB17　3.SB19　4.SA24



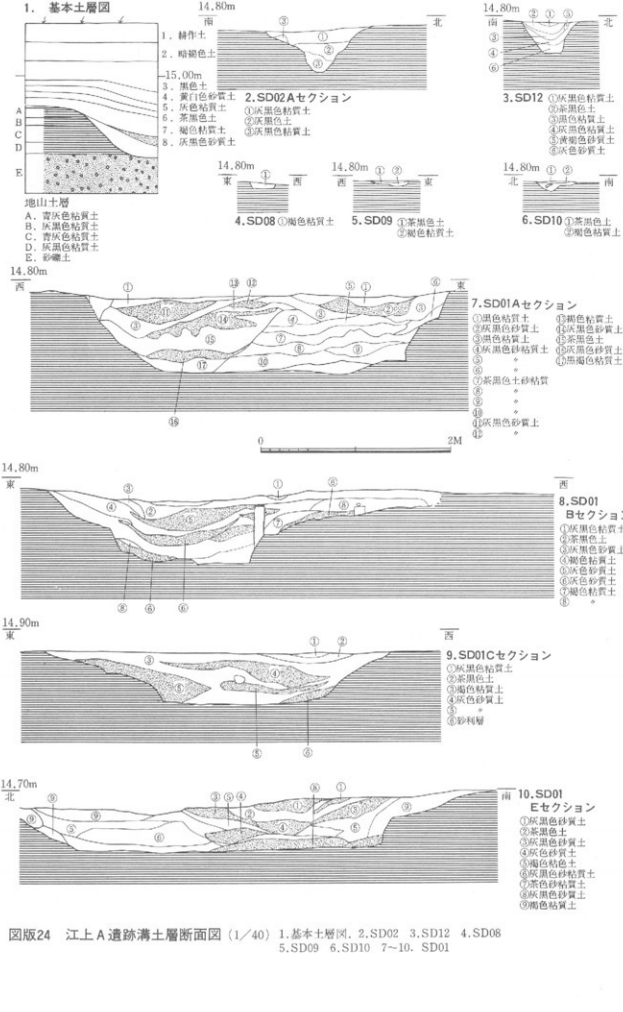
図版21　江上A遺跡遺構平面図（平面図1／100 断面図1／40）1．SB15・SD06　2．SD03　3．SB14



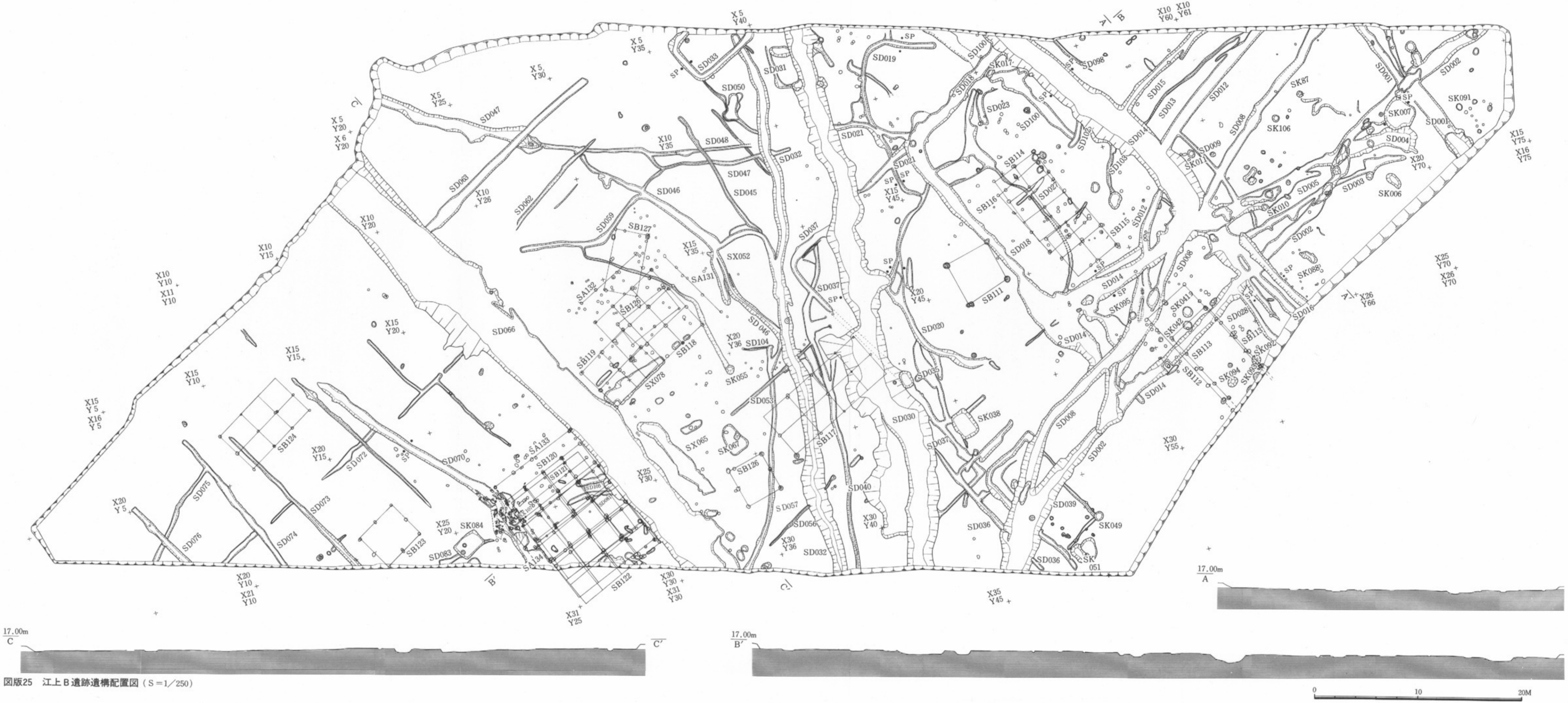
図版22　江上A遺跡遺構平面図（平面図1／100 断面図1／40）1.井戸SE26(1/20) 2.SD04 3.SD05



図版23　江上A遺跡遺構平面図（1／20）　橋SX25



図版24　江上A遺跡溝土層断面図（1／40）1.基本土層図，2.SD02　3.SD12　4.SD08
5.SD09　6.SD10　7～10．SD01



図版25　江上Ｂ遺跡遺構配置図（Ｓ＝1／250）

図版26　江上Ｂ遺跡遺構平面図（Ｓ＝1／100）

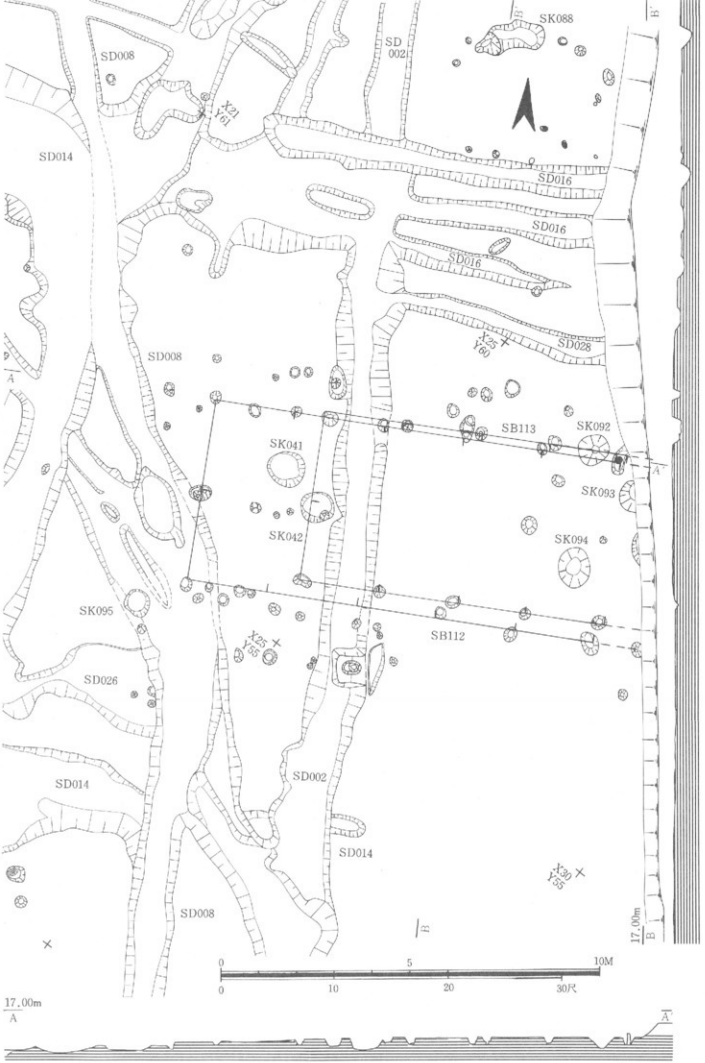
● 柱根
□ 礎板

試掘坑

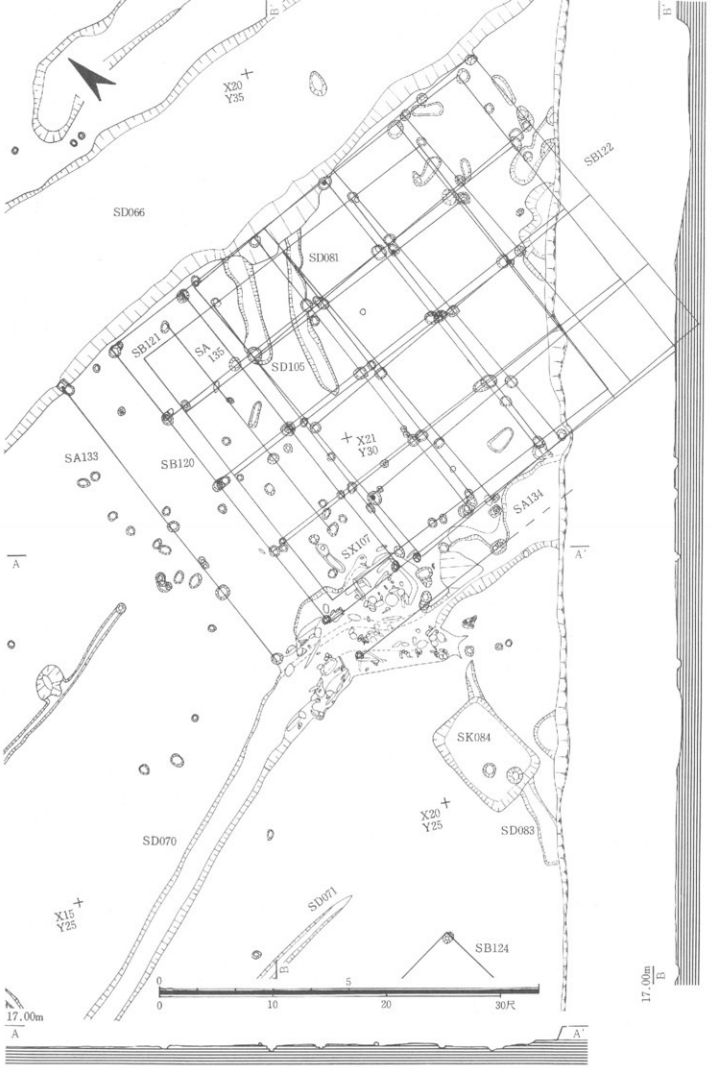
0　5　10M
0　10　20　30尺

図版27　江上Ｂ遺跡遺構平面図（Ｓ＝1／100）

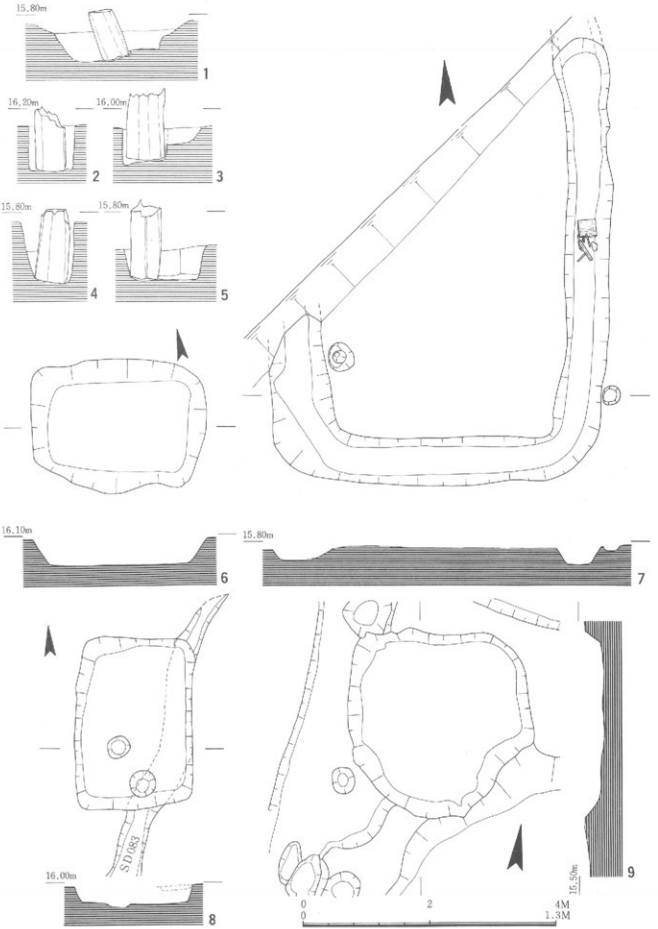
0　5　10M
0　10　20　30尺



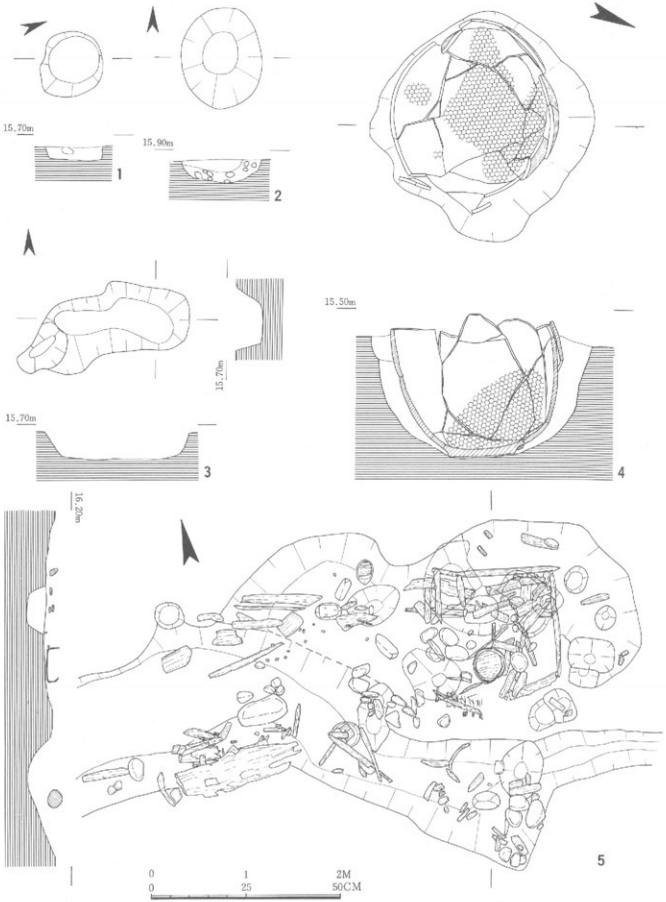
図版28　江上Ｂ遺跡遺構平面図（Ｓ＝1／100）



図版29　江上Ｂ遺跡遺構平面図（Ｓ＝1／100）



図版30　江上Ｂ遺跡遺構平面図・柱根断面図　1.SB112の柱根　2.SB121の柱根　3.SB117の柱根
4.SB116の柱根　5.SB125の柱根　6.SK038
7.SD033　8.SK084　9.SK007(1～5.1/20　6～9. 1/60)



図版31　江上B遺跡遺構平面図 1.SK095　2.SK094　3.SK088　4.SK106（北宋銭を入れた甕を埋置）
5.木枠施設付近　　(4. 1/10　その他1/40)

図版32　江上Ｂ遺跡時代別遺構分布図（Ｓ＝1／600）

図版33　東江上遺跡遺構配置図（S＝1／250）

図版34　神田遺跡　　1．遺跡全景(北から)　　2．中央建物群(南から)